

英雄がないと思つて居る様な事があつては、それこそ言語道斷であります。

日本の歴史のみが古いとは言はない。併しアメリカに較べれば三十倍程の古さである。日本といふ國は凡有る方面に於て、東方君主の國であると同時に、英雄、豪傑の國であります。併し乍ら、日本には餘り英雄が多いから、日本人は之を尊ばないのであります。物が多いと人は之を粗末にする癖があります。日本には不幸と云ひませう乎、幸福と云ひませう乎、とにかく英雄が多過ぎるから、日本國民は英雄を粗末にするのであります。従て日本の歴史には、幾多の英雄が現れて來るに關らず、これを國民が崇拜する事は少いのであります。

例へば天満宮即ち菅原道真、加藤清正、楠正成、乃木大將といふ風に、かう云ふ人は少いかといふにさうでない。私は乃木大將が英雄でないとは云はないが、楠、乃木位の人物は日本の歴史には澤山あるのであります。これはほらでも何でもないのであります。只流儀々々が違ひ、その人々の型が違ふのであります。吾々

の愛すべき英雄、尊敬すべき英雄は、澤山あるのであります。吾々日本人にして、自分の國の歴史を捨て、之を無視して、只徒に外國の英雄をのみ感心する様な事になつては、實に驚き入る次第であります。吾々の足もとには澤山の英雄が轉がつて居るのであります。まだく私の話し度い事はいくらでもあります。盡くを申し上げれば、此の次の話の種がなくなるから、申し上げませんが、とにかく日本には英雄がざらにあるのであります。日本人として、吾々は日本の英雄を大切にし、之を嘆美する様にしなければならぬと思ふのであります。之が最も大切な事なのであります。

今年はフランスの英雄と云はれて居るチャンドークの五百年祭で、世界中大變な騒ぎをして居ります。チャンドーク何者ぞ。女である。女だから何者ぞと云へば、此の講演會には御參會の御婦人も御出での様ですが、さうではないのであります。私は思ふに、チャンドークは偉人でもない、又た學者でもない。紫式部の様



な才能のあつた人でもなく、又た清少納言の様に機轉の利いた人でもない。併し、彼女は、女の身でありながら、祖國の危急を見て、敢然として馬に跨がり、國民の士氣を鼓舞し、外敵を追ひ拂つたと云ふ事が、今日なほフランス國民の心をして、愛國の熱血を湧かしめつゝあるのであります。それで、デヤンダークの五百年祭に於ては、非常なる祭典をして、その靈を慰めやうとするのであります。是即ち、「死せるデヤンダーク生けるフランス人の心を動かし」て居るのであります。昔は、「死せる孔明生ける仲達を走らす」と云ふ事があるが、今日の日本を見ると、「死せるレニーン生ける日本を始終いぢめて居る」のであります。吾はフランス人を見る時、死せる英雄を生かして、國民の心に共鳴せしめ、益々國家を思ふ事には、感心せざるを得ないのであります。現代の所謂新しがり屋、彼等は一人のレニーンのみを崇拜し、他は盡く之を排斥するやうな事がある。これでは眞の大日本の國民と云ふ事は出來ないのであります。我國には古來幾人の

英雄が出たが、之を思ひ、努力怠る事がなければ、吾々日本人は世界を敵として立つてもびくともしないのであります。此等の英雄の偉靈は、我が日本帝國を守るのみならず、今日迄、日本國民が擁護して來た英雄の精神は、生けるが如くと云ふよりも實際に生きて、吾々と共に力を協せ、永遠にこの大日本帝國を守つて行く事と信ずるのであります。それを、彼等を死んだもの、様に思ふのは、これより間違つた事はないと思ふのであります。どうか諸君が、常に英雄を嘆美すると云ふ事でありたいのであります。

### 五 英雄の長所を讚美せよ

世に澤山の英雄はあるが、其の英雄にも缺點はある。野田卯太郎君に就いて云へば野田君でも随分をかしい事もあつた。そのをかしい事を一々挙げてお話をすれば、半日位の材料はあるのであります。人間は神でない以上缺點がある。この缺



點が即ち人間味であるのであります。それを、その缺點のみを見て、この人はつまらぬと思ふのは間違であります。例へば、西郷南洲の偉い所はと云へば、體の大きい事だと思ふのは間違ひである。體も大きかつた。併し乍ら、體の外に未だ大きい所が澤山ある。それを只そのみを見て偉いと思ふのは眼光豆の如しと云はねばならぬのであります。英雄、豪傑にもをかしい所は澤山ある。それをその缺點のみを見て、あの人はつまらぬ、あの人は駄目だなど、考へてはならぬのであります。あの人も吾々と同様に面白い共通な所があるとして之に親しむやうにせねばならぬのであります。

明治六年七月に、明治天皇が、九州に御巡幸をされた時、南洲が御供を致した事があります。熊本に軍艦が著いた。愈々軍艦で立つ時に、其處は大變に干潟で、軍艦は遙か遠方にある。そこで南洲が怒つて、海軍の責任者を呼んで、「一體お前は海軍の責任者であるのであるが軍艦をあんな遠くへ置き、今頃俺を連れて來る

とは何事だ」と云つてかん／＼になつて怒つた事があるが、それは人がやつたのではない。その時のなり行きで、何とも仕方のない事である。それで側の人がつりなしに困つたと云ふ事ではありますが、西郷も人間だから怒る事もある。無理もない。或時は子分の者には横車も押す事もあるかも知れない。それを西郷は横車を押す等と云つて之を排斥し、悪く云ふのでは西郷に對して相濟まぬ事になるのであります。

併し乍ら、今日の學者は、人の缺點のみを捕へてさう云ふ事を云ふのであります。凡て偉い人でも何でも日本流の學者はまるでつまらないものにする。それはその人がつまらないのではなくして、見る人がつまらないのであります。吾々は如何なる場合にも、吾々の血管には、人間味に沸く血が常に流れてありたい。而してそれが體全體に貫流して居れば、恰も全身電流の様であつて、何を持つて來ても、直ちに火花が散る様にありたいと思ふのであります。吾々は、英雄を見て



は、電流に火花の散る如くありたいのであります。それに反して、英雄、豪傑の遺跡を見て、何も感ずる事なく、又た何等奮發する事のない様な者は、即ち唯物論なる物に迷はされ、之に溺れて、間違つた事を思つて居るのであります。

國士館の諸君、どうぞ吾々と共に英雄を嘆美して下さい。この英雄を嘆美すると云ふ事は、英雄程の人物にはなれぬにしても、その精神に於ては、英雄たるに十分であり、更に之れ以上のものであると信ずるのであります。私は諸君と共に英雄を嘆美し、我も又た英雄以上の者となり、而して我が大日本帝國の爲めに大いに貢献する事を皆様と共に誓ひ、私の結論と致したいと思ふのであります。

(昭和六年七月二十七日、國士館に於て)

## 日本歴史上の一大事相

### 一 緒 言

只今阿部博士から極めて有益なるお話がありました。定めて諸君も御満足であらうと思ひます。私も折角御當地に参りましたからして、少しばかり私のお話を申上げて見たいと思ふのでありますが、一體私はさう好んで演説をする方ではないのであります。書くといふことは私の本業であり、いくらでも書くことは嫌ひではないけれども、話すことは全く止むを得ずるのであつて、私はこれは一種の義務だと思つて話すのであります。それで私の話すことは、どうぞ貴方がたは静聽して頂きたい。失禮な申分であるけれども、静聽して頂きたい。それがいやなら外に出て頂きたいと思ふのであります。



それは今申しあげました通り、私の題は『日本歴史上の一大事相』といふことで、それを甲上げて見たいと思ふのである。第一に日本人に最も私が遺憾に思ふのは、日本の歴史を知らないといふことである。素より貴下方はさうではないが、日本人は、支那の歴史を知つてをる。或は西洋の歴史を知つてをる。然し乍ら、自分の國の歴史といふものに就いては、甚だどうも、要領を得てゐない。なるほど知らなくてもいゝやうなことは、知つてをる。然し乍ら、知るべきものは、動もすればこれを等閑に附してをることがある。私は不肖ながら、敢て自ら日本の歴史家といふのではありませんが、半生の心血を歴史に捧げてをる人間である。商賣人が金を儲けようと年中算盤と首引きするやうに、農村にある人が、年中土を相手に仕事をするやうに、私は力の敢えて凡てとは申しませんが、殆んど凡てをあげて、歴史の研究に没頭してをる。勿論私の研究は、日本歴史の一部分と申すよりも、一小部分である。一小部分といふのは『近世日本國民史』であり

ます。然し乍ら、今日に於いて既に『近世日本國民史』の約四十巻だけは出版してをります。而してその外に五六巻書き溜めてをるものがあります。もし幸ひ長生することを得れば、少くとも百巻だけは書くつもりであります。それで、私は不肖ながら、日本の歴史の一部分だけに就いては、稍貴下方に向かつて、語るだけの、資格はあらうかと考へてをるのであります。然し乍ら、苟くも日本歴史の一小部分について語るならば、日本歴史そのもの、大體について、多少の概念を有たなければならぬ。そこで今日は、日本歴史の大體について、その概念の中の、一小部分について、話して見たいと思ふのであります。

## 二 國史を一貫せる一大事相

日本歴史に於ける一大事相、一つの大きな事相といふものは何乎と言へば一言に



して盡すことが出来る。それは日本の歴史上に於けるところの、大きな運動、大きな事業、大きな鴻業、凡有るところのものには、必ず天皇陛下、然らざれば皇族方が、卒先者となつて、國民を率ゐてお出でになつたといふことである。それで日本の歴史に於いて、凡有るもの、事件のあとを探ねて見れば、必ずその所には皇室といふものが、存在してをるのである。私は、『近世日本國民史』といふ題で、歴史を書いてをる。それで、始終私の書くところのものは、國民といふところを目當として書くので、皇室といふものを目當として書くものではありませぬ。然るに、私が國民といふものを、目當てにして、書く時に於いて、一層その先に進んで行けば、皇室といふものが、儼然として光つてをるのである。それで日本の國民を考へる時に於いては、皇室を除外することは、絶對的に不可能であるといふことを、深く私は感じ、その感ずるところのものを以て、これを日本三千年の歴史に押しひろげて見たならば、悉く然らざるなしかう感ずるのであります。

又た御當地は神武天皇と最も、御縁故の土地であつて、貴下方は生れ乍らにして、勤王の精神の最も盛んにあるべきところのお方々であるからして、神武天皇のことを私が今更ら申上ぐる必要はない。神武天皇は、明治天皇の上代化したところのものである。明治天皇は神武天皇を近代化したお方である。それで、明治天皇が、昔の時代にお生れになれば、即ち神武天皇であり、神武天皇が現代にお生れになれば、明治天皇である。神武天皇の一般の御性格、御盛徳といふことに就いての、大體はむしろ古き歴史をたどるよりも、新しいところの、明治の歴史に就いて、その御精神の面影が窺はれる。それを考察した方が、早いと思つてをるのであります。

その神武天皇は、日向から、お出でになつて、日本を平定遊ばされたところの、御主君である。一々私が、日本の歴史を説いて行けば、如何に私が早く語つても、一日や二日で、語り盡すことは出来ない。私は、その中の一、二に就いて申



して見よう。例へば日本は神武天皇以來、皇室は連綿として立つてをるけれども、崇神天皇は、四道將軍を全國に派して、さうして日本を平定遊ばされた。景行天皇の時に至つては、日本武尊を東國に、九州には、天皇御自身お出でになつてをる。九州には、景行天皇の御事蹟が、頗る多いのである。日本武尊は、東國を平定遊ばされた爲めに、東國には、日本武尊の御遺蹟が多いのである。是等のことをお考へになつて見れば、日本の平定といふやうなことに於いては、色々の人が力を盡してをるけれども、日本の歴史から、もし誤つて神武天皇を除去し、崇神天皇を除去し、景行天皇を除去し、日本武尊を除去すれば、日本歴史といふものは、眞つ暗闇である。皇室の御恩が有難いといつて、空念佛ではない。實際の事實の御恩があり、實際の事實が有難い。これは決して空にいふことでなくして、歴々とその事實が證明してをるのであります。

### 三 日本の文化と聖德太子

私は一々事實を擧げて申すと、時間があまり短いから暫くそれは差扣へることにして、日本の文化といふことについて申しますと、應神天皇、仁徳天皇、その時代に始めて、日本の文化の光りが現はれて來た。聖德太子の時に於いては、大いに現はれて來たのである。もし日本の歴史の中に、聖德太子といふお方が、お出でにならなかつたならば、どの位日本の歴史は違つてゐたか判らない。所謂我が大和民族の性格といふものゝ大きな部分は、殆んど聖德太子がお作り遊ばされたといつてもよい。日本國民に向つて、一大教化を及ぼされた偉人を調べて見れば、日本三千年の歴史に、聖德太子ほど人心に微妙な感化を及ぼし給うたお方はないのである。その聖德太子といふお方は、我々が想像し奉るよりさらにお偉い方である。日本に於ける郡縣の制を布かれた方は、どなた乎、天智天皇である。



日本に於ける經濟上の田制を定め、又た日本の制度、文物をお定めになつたお方は、どなた乎、天智天皇、天武天皇、所謂る大化の新政、大寶令の制定などといふものは、この時代である。貴下方は、日本に於ける憲法政治は、明治天皇の時に、はじめて行はれたとお考へになるけれども、日本に於ける憲法の源は、聖徳太子の憲法にはじまり、大化の新政、大寶令の制定など總てのものが、だん／＼連続して、而して明治の御代に及んだものであります。

#### 四 對外的國民精神の發揮

さらに元明天皇の五年正月には、太安麻呂といふものが『古事記』を書いてをります。元正天皇の四年には、舍人親王と申しますお方が命を奉じて『日本書紀』を書いてをります。『日本書紀』など、いふものは、日本歴史の爲めに出来

たのである。是は日本が支那に向つて、國民的精神を發揮したところの結果である。支那人に向つて、お前の國にも、歴史はあるが、お前の國には、三皇五帝と書いてあるが、俺の國には、なほそれよりも古いところの歴史があると、威張る爲めに神代の卷から起つた『日本書紀』といふものが出来て來たのである。これは一方の意味に於いては、當時の天皇が日本の歴史を、編述させたのでありますけれども、それ以上の意味は即ち外國に向つて、我が國民的精神の發揮であります。

例へば奈良の大佛の如き、此處にお出での若い方々は、修學旅行で奈良に行かれば、奈良の大佛を見られたであります。何んの必要があつてあゝ云ふ大きな佛様を拵へた乎、あゝいふものを拵へるほどならば、むしろこれを地金にして、賣飛ばしたが良いではない乎といふ風に、考へる人があるかも知れません。然し乍らこの大佛の出来た時代は、即ち支那に於ては、唐の時代である。唐といふ國



は、帝國主義で、殆んど世界に手を擴げたのである。支那に於いて、最も漢民族の隆盛を極めたのは、漢と唐である。唐の時に於いては、唐の勢力は、殆んど一方は中央亞細亞を越え、地中海に達してをつたのである。一方は朝鮮に及び、勢あたるべからざるものがあつた。その時に於いて、我朝の奈良に大佛が出来たといふことは、決してこれは偶然のことではありません。一言にして云うて見れば、「お前さんの國にも、色々結構な佛様が出来たが、わしの國にはかういふものが出来た」と誇る材料に造つたものであります。

之を云うて見れば、今日アメリカで戦闘艦を造れば、日本でも戦闘艦を造つて、「わしの國の軍艦はこの通り」といつて見せるのと意味に於いては變らない。佛様と軍艦を一緒にして云ふのは、少し變な話であるが、佛様が出来たからとて唯信心ばかりではない。あゝいふ佛様が出来たのは、信心ばかりではなく、色々の魂膽があつて出来たのである。私は別府あたりにあるところの鐵筋コンクリートの

佛様でも、決してあれは信心ばかりで出来たものではないと思ふのである。かくの如きところのものは、みんな色々な意味がある。聖武天皇などは、どうもわけの判らないお方で大きな佛さまなどを拵へてほんとうにどうもしようがない、佛法に凝つたお方」と思つてをるが、その時日本と唐との接觸したところを考へて見れば、日本にもこれ位の事は出来るぞ、馬鹿にして貰ふまいと、支那に對する、對外政策の一つである。と申して私が今さら證據を出すことは出来ない。聖武天皇に向つて伺ひ奉るところの途はない。さう想像するより外は、仕方はないのであります。

## 五 後醍醐天皇

時間が経ちますから、大飛びに飛んで南北朝の話を致します。皆様方は、楠正成が偉い、新田義貞が偉い、名和長年が偉いといつて色々南朝の人々を譽めてをら



る。なるほど、彼らは忠臣である。然し乍ら、南朝の歴史を説く人は、脇役の仁王さまとか四天王とかいふものをしきりに拜んでゐて、却つて御本尊さまを忘れてゐる。私共の考へでは、當時の歴史に於いて、後醍醐天皇ほど偉いお方はないと思ひます。凡ての點に於いて、このお方は偉かつた。學問も偉い、見識も偉い。しかしあまりにこの天皇が偉ら過ぎて、この天皇さまを輔くる人に、天皇さまを諫むるほどの力あるものが居らなかつたといふことは、洵に残念で、藤原藤房に、維新時代の岩倉卿ほどの力量があつたならば、少しは後醍醐天皇のためにもなり、局面が大分變つたであらう。これは力量の問題で、我々が南朝の忠臣に就いて考へて見る時に於いては、楠正成、新田義貞、名和長年皆偉い忠臣である。然し乍ら、その上に臨んで居らるゝところの、後醍醐天皇は、なほ偉いと思ふのである。これらの問題に就いては、仲々今私が一朝一夕に申上げても盡きるものでない。然し乍ら、これまでの歴史家は眼光豆の如く、豆といつても大きな豆ぢやない。小豆位のものである。まるで後醍醐天皇を、問題外に置いて、尊氏はどうか、もしくは正成はどうかいふことを考へてをる。後醍醐天皇は南朝の歴史に於て單に天子様としてばかりでなく、人物としても偉いお方であります。

## 六 孝明天皇

又たそれらの點については、色々の経緯は他日の機會をもつてお話申しますが、最近に於いて維新の事業といふものに就いては、貴下方は、或は吉田松陰、或は藤田東湖、或は橋本景岳、或は水戸烈公、越前春嶽公など、色々の方を知つてをらるゝであらう。又た維新の元勳として西郷、木戸、大久保といふものを三傑としてをらるゝ。又た三條岩倉といふ人々を、公卿の中の元勳としてをらるゝであらう。これには私も異存はない。然し乍ら、維新回天の事業といふものは、誰れが



大きな力であつた乎と申すと、私の見るところが間違でなければ、明治天皇の父君であるところの、孝明天皇といふお方が、最もお力をお盡し遊ばされた。この天皇は、御齡十七歳で位にお即きになつた。二十年間實に、針の簾にお座り遊ばされて、御心配遊ばされた。そして御在世中途に目的を達せられず、崩御遊ばされた。然し乍ら、この天皇のお偉いといふことは、調べれば調ぶるほど明らかである。私は只今孝明天皇の時代を書いてをる。もう書いてしまつたものは、十冊ばかりになつてをる。それで孝明天皇のお書き遊ばされたところの御直筆、私は御直筆を拜見は出来ないけれども、その寫しを拜見した。それには色々なものが残つてをる。この天皇様は、お偉いお方であつた。この天皇様が、原動力となつて、そして人心を鼓舞遊ばされた。それ故此の天皇様のことを申さなければ、維新回天の事業は、あり得るはずのものでない。勿論みんなの人が奮起した。例へば吉田松陰先生は、何んの爲めに斯くの如く、一身を犠牲として、國家の爲め

に盡した乎と云へば、孝明天皇が、毎朝鷄鳴に起きて、國家臣民の爲めにお祈り遊ばされる、その國事に對し、宸襟を惱まし奉るところに感激して、自ら王事に盡すべしと決心したといふことである。それは、吉田松陰先生の隠れたる信念であります。みんなもその通りである。貴下方は、孝明天皇といふお方は、いろいろの人が、下から申上げた事をお聴きになつて、それでお動きになつたのであらうといふお考へであるかも知れませんが、さうではない。孝明天皇の方から、やつて來たのであります。孝明天皇が九條關白にお與へになつたところの、御親翰がある。九條關白と申すと貴下方御承知であります、英照皇太后の父君である。畏れ乍ら、孝明天皇におとり申しては我々臣家の言葉で云へば、舅にあたるお方である。ただの關白ではない。皇后陛下のお父さんである。その九條關白にお與へられた親翰によつて見れば、「今度關東からは堀田備中守といふものがやつて來るが、聞くところによれば、澤山の賄賂を持つてお前さん達に色々なも



のを配つて、そしていろいろの細工をするさうである。就ては自分の方に献上するものでも、自分は一切それを受取らないつもりであるからして、どうぞお前さん達も今度こそはさういふ贈物は取らないようにして貰ひたい」といふ御文面である。御経験から申しても、一方の方は若い。一方の方はもう経験を積んだものである。九條關白から孝明天皇に申上ぐべき事柄であるのに、孝明天皇の方から、九條關白に向つて、どうぞ「今度は、お前らしつかりやつてくれ、賄賂などに眼を眩まされてはいかんど」と、云つてをられる。

孝明天皇が一番御信用になつたのは、近衛忠熙公、この人は勤王の志が篤かつた。その忠熙卿の門下に入るところの人が、所謂僧月照である。その僧月照の親友が、即ち西郷南洲である。總て上からものが來てをるのである。上からものが來れば、下からものが行くことは當然の事である。我が日本の維新の大事業大運動といふものは、天降りの事業であり、又た下から持つていつた事業であ

る。所謂上下一致君臣心を同じうして、出來たのが維新回天の事業である。これは私が今日まで書いてをるところによつて御覽になつても、證據は十二分にあると思ふのであります。

### 七 明治天皇

更に進んで、私は明治天皇の事を申して見たい。實は本日この事を申す爲めに、長いところを歩いて來た。明治天皇の御事業に就いては、餘程有難いことが澤山ある。何んとも云へないことが澤山ある。例へば廢藩置縣、例へば條約改正、例へば地方自治制度の制定、例へば陸海軍の制度の如き、例へば明治廿七八年の役、三十七八年の役、例へば帝國憲法の制定、帝國議會の開設、その他凡有ることについては、色々の人がこれをお助け申してをる。或は有栖川宮、岩倉卿、山縣



公、伊藤公凡有る人々がこれに携はつてをるが、かんじんの明治天皇の盛徳大業を、歴史家が殆んど忘れてをる。彼等は無論偉い人々である。然し乍ら、彼等何者ぞ。明治天皇あつてこそ明治の聖業といふものは、出来て来たのである。それに、憲法は私が作つたなど、我が物顔にいふものがある。況んやその話を漸く筆記した位のもの共が、自分らの腕で、憲法を拵へたなど、いふのは、實に聖明を冒瀆し奉る言語道斷の沙汰である。我が憲法といふものは、明治天皇の勅命で出来た欽定憲法で、天皇様でなければ出来るはずのものではない。これを、翼賛したる人には伊藤公の如き人がある。或は伊藤公を援けた人はあるが、天下何者ぞ。憲法は我々の力で出来たといふことを公言するものは、これは私は何かの間違ひであらうと思ふ。次ぎに、我々は帝國憲法よりも、尊いとは云はない、帝國憲法と共に有難く感ずるところのものは、何んである乎と云へば、即ち最近貴下方がお祝になつたところの、教育勅語である。この教育勅語といふものは、

決してこれは下から持ち上つたものでなくして、お上のお考へからして、出来たもので、しかもそのお考へは、一朝一夕でない。少くとも明治十二年頃からお初めになつた。さうして明治廿三年に至り、出来たものである。出来るまでには、少くとも十年間以上の期間があるのである。その期間は、お上は御頭の中にお貯へになつて、幾度も／＼お考への末に、遂に彼の如き立派なものが、出来たのである。もとよりこの勅語を書いたところのものは、元田先生、井上先生、さういふ人々が啓沃の功を立てたのである。然しそれはお上の思召を奉體して、筆を執つたのである。斯くの如きものを作れといふ御命令は、何處から出た乎といへば、明治天皇から出た。又たその教育勅語の内容は、かく／＼であらねばならぬといふことは、誰から出た乎といへば、明治天皇から出た。これは、私が自信をもつて申上るのである。それについては、極めて確實なる證據を有つてをる。これは私がその時代の歴史を書く時には、最も貴下方に逐一證據を突きつけて、この



通りであるといふことを申上ぐることが出来る自信力があるのである。それで所謂日本歴史上の一大事相といふのは所謂日本の主なるところの出来事、日本の國家に重大なる影響を與へたところの出来事、日本の歴史上に於いて磨滅すべからざるところの出来事、それらのものは、素より天子様もしくは、皇族ばかりではない。凡百國民の力がなければならぬことは、論を待たないけれども、その原動力となつて、その卒先者となつて、その統率者となつて、その事業を完成さるゝところのものは、皆實に天皇及び皇族方のお力である。即ち、近くは維新回天の事業、明治時代の出来事、而して近く我々が祝うたところの教育勅語の如きは、その最も歴々として昭々乎たるものであるといふことを、私は言明して茲にこの演題を終らうと思ふのであります。

(昭和六年三月二十六日、延岡町延岡劇場に於て)

## 日本歴史の考察

### 一 國史を尊重せよ

皆様方は、只今まで、大阪毎日新聞社講演課長和氣君の、極めて有益なるお話を聴きになつたであらうと思ひます。私はこれから、しばらくの間皆様方の御静聴を汚したいと思ひます。

私の題は「日本歴史の考察」といふことになつてをりますが、これは寔に大きな題でありまして、日本歴史三千年の間のことを、僅か一時間でやらうといふことは、如何にスピード時代と申しながら、むつかしいことでもあります。しかしその中で最も重なる點だけを、私は皆様方の御參考に供して見たいと思ひます。

私は日本國民に取つて最も大切な財産は何である乎と申しますと、それは歴史で



ある。日本の歴史ほど大切なものはないと思ふのであります。その大切なる日本の歴史を閑却して、反古同様にして置くといふことは、國民の心得が悪いばかりでなく、實に經濟思想のない國民と言はねばなりません。世界に於ける何れの國と雖も、歴史を持たない國はありません。國あれば必ず歴史があります、併しながら他所の國に於きましては、それ〴〵結構な歴史といふものが無くて、往々にして殊更らに拵へた歴史を持つてをる國があります。他所の國の歴史を悪く言ふではないが、北米合衆國などいふ國は、金は非常に持つてをるけれども歴史は非常に貧乏である。金持であつて歴史に貧乏である。北米合衆國は、丁度金持ではあるが、身分が卑しいとか、成上りで系圖が芳しくないとかいふ連中が立派な系圖を拵へるやうに、この合衆國も色々のものを拵へてをる。ワシントンなどいふ人も、結構な人ではありますけれども、普通の結構では遣り切れぬからだんだん此のワシントンを押し立て、お釋迦様以上のものにしてしまつた。然しなが

ら、歴史がだん〴〵事實を明かにしまして、ワシントンも酒好きで妾を置いたり、又た奴隸制を採用したり、又た勘定はなかく目が高かつた。かういふことをだん〴〵調べると、ワシントンの箔が少しづつ剝げかゝつて來ました。米國では歴史を保存しなければならぬといつて、やつと拵へた歴史は、だんだん剝げかけて行くので、可なり困つてをるやうな次第であります。

ところが我國に於きましては、この三千年の歴史といふものは、如何に割引致しましても、如何に差引致しましても、實に立派な歴史であります。他の事に於きましては、世界の或る國に或は一步を譲るかも知れませんが、その歴史に至つては、世界何れの國と比較致しましても、我が帝國の歴史に勝る國はありません。斯の如く有難き歴史を持つてゐる國民が、この歴史を閑却してしまふといふことは、實に遺憾千萬なことであると思ひます。この歴史を閑却して思想國難などいふことを叫んでをる者の氣持が分らない。畢竟この歴史を閑却してをるから思



想國難など、いふことになるのだ。かういふ風に私は考へてをるのであります。皆様方も御承知の通り歴史といふものは、國民の歴史であるから、國民の歴史ならば何れの國民の歴史もさう違ふものではないといふ人があるかも知れませんが、併しながら同じ人間でも個人には必ず個性といふものがある。兄弟と雖も身體が違ふやうにその性格も違ふ。親子も夫婦もその通り。況や國民の團體に於いては、この團體を代表して行くところの歴史といふものが、大なる違ひがあるといふことは斷じて疑を容れないのであります。それで御同様米國の歴史も、英國の歴史も、支那の歴史も、日本帝國の歴史も、歴史には相違ないではない乎といふ議論をされる方もありませうが、我が日本の歴史といふものは、日本限りの歴史であり、日本ばかりの歴史であります。日本の歴史は支那にも適用することが出来ず、その他何れの國にも適用することが出来ないのであります。日本の歴史は日本だけの歴史であるといふことを心得て頂きたい。

## 二 日本歴史の特色

これから日本歴史の特色の一、二點に就いて皆様方の御參考に供して見たいと思ひます。日本の歴史の特色は何である乎と申しますと、何と申しましても萬世一系の皇室を戴いてをることが日本歴史の特色であります。さうして斯くの如きところは、何處にもない。或る人がいや有る、アフリカのエチオピアにある。近頃日本と通商條約を結んだ國で、この間、向ふの外務大臣が來たではない乎といふ方があるが、私は不幸にしてエチオピアの歴史を知らない。このエチオピアを或はアビシニヤともいひますが、このエチオピアの歴史を研究してをりませんか、何ともいふことは出来ません。假りにその國の皇帝が血統が續いたとしても、日本と同じことであるや否やといふことは、私は知りません。併しながら、私の知り得る限りに於きましては、萬世一系今日の我が皇室の如きものを戴



いてをる國は、唯だ日本だけであり、日本の歴史だけであるといふことを、私は斷言して憚らないのであります。これを御承知にならうと思へば、お隣り支那と比較して見れば、一番よく分ります。お隣といへば、今も騒いでゐる支那だ。この支那といふ國は、寔に大きな國であつて、國の廣さは日本の十六七倍位あるかも知れません。併しながら又た人口の澤山であることは、四億以上といふことで、或は四億五千萬といふことになつてをります。何れにしましても、日本の人口の五倍以上はある。その支那と較べて御覽になつて、何處が一番違ふ乎といへば、支那には廿四朝といふ歴史がある。日本にはたつた一つの而して只一つに限る歴史がある。支那の代の變つたことは廿四度、日本は唯だ一つであります。凡そ支那に於きましては、力さへ強ければ、誰でも皇帝になることが出来るのであつて、支那の政治家の最後の理想といふものは、何んである乎と言へば、皇帝になりたいといふことであります。しかし日本の政治家の理想は何になりたいと考へ

てゐる乎といへば總理大臣になるといふことをもつて、政治家の絶頂と思つてゐる。この政治家であつて、その最後の理想が、總理大臣である國と、皇帝になりたい國とは、どの位違ふ乎と申しますると、同じ皇室と言ひ同じ皇帝と申しますけれども、支那では唯だ上に戴くだけの皇帝である。例へて申せば帽子の様なもので、夏が來ればカン／＼帽を戴き、今頃になれば又たそれを閑却して羅紗の帽子を戴き、運動の爲めには烏打帽を被り、宴會に行く時にはシルクハットといふ様に取り替へ引換へ、頭の上に戴せてゆくのである。その時々によつて違へる。又たその代價にしても高いものは廿圓もするし、安いものは五十錢一圓程度のもがあるやうに、皇帝でもその通り。廿圓の値打のある皇帝を戴いてをる時もあるれば、五十錢一圓位の皇帝を戴いてゐる時もあるといふやうな次第であります。何時でも皇帝に成れる、力さへあれば皇帝になれるといふのが支那といふ國である。それに引替へ、我が日本に於いては、皇室といふものは、何乎と言へば、所



謂る萬世一系の皇室であつて、我々臣民はその皇室に對して、三千年來忠勤を勵んで來て居るのであつて、皇室がなくなれば日本の國家はなくなるのであります。皇室といふものは、我が日本を一つの身體とすれば頭である。世の中に頭と帽子とを同一に見る者が何處にあります乎。

支那の皇帝は帽子である。日本の天皇様は頭である。帽子は取替へ引換へするところが出来るけれども、頭といふものは取替へ引換へすることは出来る筈がない。これは即ち我々は首がなくなつて、手足が動くはずはないのであります。茲が即ち日本歴史の大眼目であります。どうか皆様もこの眼目に就いてお考へ下さるやう願ひます。

それで日本に於ては三千年の間に於いて皇帝にでもならうといふ大それた考へを持つたといふ者として歴史に掲げてあるのは、弓削道鏡、平將門の二人であります。併しながら弓削道鏡のことは私にはよく分らないが、多分道鏡といふものは、

所謂る皇弟で、皇室の血を受けてをるものであるといふ人がありますが、このことに就いては、私はまだ十分の研究をしてをらない。世の中には分らないことを強ひて分つた様にする必要はない。私どもでは十分分らないが、想像に依つて考へて見れば、道鏡は餘りに増長して、氣が違つたのであらうと思はれます。それを當時謀反人など、せずして、下野の薬師寺といふお寺に追ひやられたのであります。この薬師寺といふのは、今日で言へば東京の松澤病院、即ち癲狂院のやうな所で、そこに追ひやられたものと思ふのであります。當時の政治家が彼を逆賊として殺さずに、下野國に追拂はれたのである。彼は心からの逆賊ではなく、増長我慢誇大妄想狂の結果であつたらうと思ひます。相馬將門に就いては、私は種種研究してをります。しかし茲で將門のことを申して、彼是と論ずる譯ではありません。それで、茲を手軽く切上げますが、あの騒ぎは、詰り政黨騒ぎであり、戀愛問題であります。つまり政權慾と愛慾所謂る戀愛慾と政權慾とが、相錯綜



して、あの騒ぎが起つたのである。どつちからでも、先に京都に注進したものが、勝つたものである。將門反對者が、早く京都に駈付けて謀反のことを、注進したから、將門もとうとうあゝいふことになつたのであつて、どうも致し方なくなつてしまつたのである。この一事をもつて眞面目に、彼の袁世凱が皇帝になつたのと同様の意味に取るといふことは、日本國民の眞意を知らないもので、左程問題とするに足らないのであります。

大體から論じて見れば、日本で一番偉い方は誰乎と言へば、頼朝、信長、秀吉、家康などで、斯の如き英雄豪傑は支那にあつたならば、皇帝になつても足りない人だが、頼朝にしても、秀吉にしても、信長にしても家康にしても未だ曾て皇室に刃向うたことはない。彼等の遣り方に就ては、或は私どもが感心しないこともありまされども、彼等は矢張り皇室に對して、忠勤を勵んでをる。信長などは勤王の志篤く、頼朝も實に勤王のことに就いては、極めて注意周到な人であつ

た。曾て或人が頼朝に言つてやつた手紙に「御」といふ文字を使つてゐたところが、これは御上、即ち皇室に向つて申上ぐる言葉であつて、私に對してこういふ字を使つては甚だ良しくないと云うて戒めたことがあります。さういふことから考へて見れば、日本の政治家は將軍に成らうといふ者或は關白に成らうといふ者、或は總理大臣に成らうといふ者はある、併しながら未だ曾て皇室に向つて弓を引いたものはないのであります。これが即ち日本の歴史の特色であります。

### 三 皇室と日本の歴史

それから第三に皆様方の御注意を願ひたいことは、凡そ日本の歴史に就きまして、大事件、大運動、大なる仕事といふものは、一體誰が遣つたかといふことになりますと、皆な天皇様か皇族方が所謂の主力になつて、お遣り遊ばしたのであり



ます。他所の國では皇帝など、いふものは、唯だ租税を取つて、人民を痛めてさうして自分の驕りを擅にするといふことを理想にして威張つたといふ例が少くないのであります。日本の歴史に於きましては、凡有る國家の仕事といふものは、皇室が先に立つてやられる。これもその例が餘り多くあるから、一々申上げられません。神武天皇が自ら國をお建てあそばした時の如き、崇神天皇が日本を御平定あそばされ、四道將軍を置かれて、統治遊ばされた時のごとき、若くば景行天皇が諸國を巡幸されて、さうして人民の歸服せざるものを鎮撫されたるがごとき、若くば日本武尊は自ら九州の熊襲を討たれ、後に東國の蝦夷を討つて日本の平定に向つて、大なる力を致されたるがごとき、斯のごときことは他にもいくらでもあります。それから日本の所謂新文明新時代ともいふべき、推古天皇の時、攝政として天皇を御輔けになつた聖德太子は、皆さんの御承知の通り、日本が一度むけた時代といふよりも、寧ろ日本を一度むいて文明國となされ

たお方でありませう。この太子の御事業を見まして、それが如何に重大であつた乎といふことがお分りになりませうが、その御事蹟は、二日や三日かゝつても、お話し出来ぬ位ひであります。大化大寶の時に於ける天智天皇、天武天皇、これらのお方々が日本に於て、人權の政治をお布きあそばされ、法律を定め制度を立て、日本が法治國となつたのであります。これら總てが、日本の皇室、天皇、及び皇族のお方々がやつてをられるのであります。

南北朝のごとき、後醍醐天皇や何かに就て、世の中の人が、どうも後醍醐天皇がつまらない、正成や義貞などを討死させて、寔にどうも、困つたお方など、いふ考を持つてをる人があるかも知れませんが、後醍醐天皇といふ方は實にお偉い方でありませう。その時代に於いて後醍醐天皇ほどの御腕を持つてをる政治家は一人もなかつた。正成であらうが、義貞であらうが、後醍醐天皇から見れば、本當に一つの唯の大將一つの將校に過ぎなかつたのであります。後醍醐天皇が餘りにお



偉かつたので、その周囲に偉い人物が少かつたのである。私は常に思ふ、若し藤原藤房卿といふ方が、岩倉公ほどの偉い人であつたら、かの建武中興の末路のやうなまづいことはしなかつたであらう。藤房卿は忠義な人ではあつたが、政治家といふ點に於いては、後の岩倉公には數等及ばない。さういふ風で、あんまり天皇様お一人がお偉く、他の政治家に偉い人物が少く、正成や義貞といふ人は、政治家といふよりも、武將の方であつたから、遂に建武中興は、あの通りに不首尾に終つたのではあります。貴下方はこの建武中興を偶然と考へてはいけません。これを理想として王政維新は成就したのであります。建武中興といふものを理想として孝明天皇の維新の大事業の幕は切つて落されたのであります。そこで後醍醐天皇の御事業も、決して無駄ではなかつたのであります。

それから維新のことに當つては、皆様方も御承知の通り、維新の元勳として西郷、大久保、木戸、などをお數へになりますけれども、維新の事業に就いて最も偉く

お働きあそばされた方は、何と申しましても、孝明天皇であります。私は日本の歴史に就ての研究者であるといふやうなことは申し上げる資格はありません。併しながら、維新の歴史に就て私は半生の力を盡して研究してをるのであります。この點に就ては、不肖私も皆様の前に大きい聲を擧げて申上げても、決して不遜ではないと思ひます。そこで私の研究によつて申上げて見ますれば、維新に於て最も大なる仕事を遊ばされたお方は、孝明天皇であります。明治年代に於いて、最もお偉い方は、明治天皇であると同様に、畏れ多い話であるが孝明天皇を除きましては、維新の歴史は書けないのであります。明治天皇を隠してしまつては、明治の歴史は、全然白紙になつてしまひます。これによつて考へて見ましても、日本の大なる運動、重なる運動、主宰者とか、主動者とかになつてをられる方は、皇室或は皇族方であります。是も亦た日本の歴史の一つの特色として考へなければならぬことであらうと思ひます。



## 四 よく外物を容る

それからもう一つ貴下方に考へて頂きたいことは、日本人は實に何でもよく食べるといふことで、これは實に不思議な民族で、食ひしん坊といつても良い。日本人の鼻つ先に餌を出せば、何でも一ぺんは食べるのであります。これは眼の前にさへ置けば食べるばかりでなく、自分で漁り歩いて其處此處から拾つて來ても食べる。さうして美味しいものを食べるばかりでなく、時としては、ちつとも美味しくないものでも食べる。恐ろしい胃の腑の持主である。單に肉を食べるばかりでなく、骨までしゃぶる。時としては、頭からでも、足からでも、丸呑みにするといふやうな健康な胃の腑を持つてをる。これは一つの特徴である。世界の凡有るものを、日本に持つてくると、日本人は決してそれはいや、これは嫌ひといふやうなことは言はない。それもこれも結構忝けないといつて、何でも彼で

も取込むといふのが、日本人の特色であります。排外思想といふものは、日本には初めからないのであります。所謂總ての日本人の手の届く限りは、熊手で引寄せるといふのが、日本の主義であります。然るに、日本人が排外といふやうなことをするのは、どういふ譯乎と申しますと、それはあんまり何でも食べ過ぎた結果、下痢をすることがある。その下痢をやつた時が即ち排外といふことになる。これは食べ過ぎた結果であります。決して食べず嫌ひではない。あんまり食べ過ぎて、下痢を起したのであります。これが又た日本の一つの特徴であります。それで、昔は支那の制度を日本に、そのまゝ移したことがあります。又た維新以來、西洋の文明が入つて來た時は、西洋の文明そのまゝを、移したことがあります。しかしそこが、日本歴史の特色であります。さうして、それが面白くなければ遠慮會釋なく止める所が、日本の特色の著しい例であります。



## 五 言論よりも實行

次にもう一つある。日本人は議論といふことがどうも下手で、理窟といふことが上手でない。日本には宗教といふものは殆んどない。佛教もインドから、儒教も支那から、基督教も西洋からといふやうに、日本には宗教がない。その他哲學も實はない。日本人は理論といふものが寔に下手だ。然るにその理論を行ふ者は誰がやる乎といへば、日本人である。佛教の本家本元のインドでは佛教といふものは、殆んど見る影もない有様であつた。然るに、欽明天皇の御代になつて我が日本に來まして今日に至つたのであるが、非常に盛んで、今日に於ても、愚夫愚婦などいふことではない、聰明叡智の人が、この佛教によつて、精神の修養をしてをる。儒教は、どう乎といふと、支那では、この儒教といふものは、一切行はれてゐない。若し孔子様が言はれた「己の欲せざるものは人に施すこと勿れ」といふことの一言半句で

も、支那人が考へたならば、排日、抗日などの出來るはずはない。己の欲せざることを人に施してゐるのが、現在の支那である。日本人も、支那人に、賣るだけのものは買つてをる。日本人は、支那に對して、ボイコットしたりなんかはしない。然るに支那は、己の欲せざることを、日本に施してをるではない乎。支那はよく理窟を考へる國である。支那の歴史には、理窟をいうた人は澤山をる。しかし日本人は支那人が発見した理窟を、自分の適當なるだけを取つて、さうしてそれを實行してをる。詰り向ふが喋る方の人種で、こつちが行ふ方の人種といふことになる。今日日本人がジエネヴァに於て、支那の代表に言ひまくられてをるといふことは、これは、三千年來持つて生れた、喋べることの下手な證據であります。別にそれを恥と思ふ必要はない。唯だ向ふは喋べるだけで、こつちは遠慮會釋なく行ふだけである。これはどうも致し方はない。自分で考へて、自分で行ふ哲學に於ても、第一實行と云ふことであらねばならないのであります。



つまり、理窟に於いては、インド人にも支那人にも、負けてをるが、併し日本人は、よくそれを行うてをるのであります。もし日本人が、將來實行といふことを忘れるやうになつては、もう終りであります。それで、日本人は、實行、即ち實行力を行ふもの、その點について、我々の祖先以來傳へて來たところの、この特色を服膺して、今後にもこれを行うて行く必要があると考へるのであります。

それからもう一つ。日本人には、不思議な性質があります。日本人は、物を學ぶといふことが、非常に好きである。これはどうも西洋人が見て驚く。私は維新の歴史を研究してをりますが、西洋人は日本に來て何やかや可なり澤山見てをるが彼等が驚くのは、日本人といふ人種は、人に物を聞くことがひどい。これはどういふものである乎、これはどうすれば良くなる乎といふ様な譯で、人に物を聞くことが、實に驚くばかりで、見たものは、手帳に書き付け、お負けに繪圖面を作るといふやうに、日本の役人といふものは、皆必ず小さな手帳を持つてゐて、直きに船に乗つて來て、鐵砲があればその鐵砲の圖を取り、蒸氣機關を見ればその圖を取り、船長が居ればその船長の顔まで取る。實に不思議な國民であるといふことを書いてをる。今日でも、西洋の製造場或は工場などには「日本人入るべからず」と書いてある所が澤山ある。それは、日本人が、向ふの人の、一生懸命にかゝつて發明したことを、一寸拜見して手帳に失敬してくるのであります。別に泥棒のやうに、物を盗むんぢやない。向ふの發明したものを、見てこうすればこうなるといふことを、奪うて、うちに歸つてさつさと研究して、こつちのものにして仕舞ふのであります。これはどうも、一種の日本人の長所といつて好い。或はこれで、日本人は猿のやうな人種で、物真似をすることがうまいといふことになつてゐます。この物真似をするといふことに就いて、私も又たさう思ひます。しかし茲に御同様研究して置く必要があります、それは何である乎と申し



ますと、烏が鵜の眞似をするといふ言葉があります。然るに近年は、鵜の眞似をすれば、鵜の様になるのである。或はそれ以上になるのである。さうすれば、所謂弟子が先生以上になる、これは弟子の咎でありませう乎。又た弟子として踏むべからざる道でありませう乎、日本人が人眞似をするといふことを笑ふものがあつても、決して遠慮會釋はないのであります。好いことならば、どし／＼取つて良いのである。我々は、誰の眞似でもして良い。唯だ悪い眞似をせねば好いのである。この點に就いては、日本人が世界の總ての善を探り、長を探るといふことは、日本の歴史に於いて、寧ろ誇るべきことであつて、必ずしも、怪しむべきことではないと思ふのであります。

### 六 よく外物を模す

それからその一つの例を申し上げますならば、どの位日本人といふものが、眞似の上手である乎といふことを申し上げますと、皆さん御承知の通り、嘉永の末から安政の初めに當つてペルリが、四隻の船を率ゐて江戸灣に這入つて來ました時に、日本では黒船が來たといつて、上を下へと騒いだといふが、その後間もなく安政六年には咸臨丸といふ船に、勝海舟先生が船長になつて、兎にも角にも、小さい船でありながらアメリカまで、乗附けて、又た歸つて來たのであります。六年前には、船を見て吃驚して、上を下へと黒船來で騒いだ日本人が、その六年後に、もうその黒船に乗つて、しかも船長として、船を操縦して太平洋を横斷して歸るなど、いふことは、これは、他所の者では出來ない。日本人でなくては出來ないことである。日本人といふものが物を習ふに、熱心であるばかりでなく、その習得に妙を得てをることは、實に驚くほどであります。

それで安政四年の末から、五年にかけて米國の總領事のハルリスといふ人と、岩瀬肥後守、井上信濃守の二人が、條約の談判の衝に當つた。その時に、日本人は



何にも知らないで、無我夢中に、談判をしてをるが、實に又た偉い者ばかりだ。岩瀬肥後守などは、一體公使といふものは、何をする職である乎といふことを、向ふの公使に聞いてゐる。さうして公使といふものは、その國の代表者であるといふことを聞いて、初めて分つたやうな有様であります。かういふ風に、總て今日は向ふの人の話を聞いて覺えて、翌日は向ふの人と取組んで、太刀打して、向ふの人に殆んど、ためらはせてをる。實に驚くべきものである。その爲めに、安政六年七月十三日に調印したところの日米條約など、いふものは、實に立派なものである。私どもは、それに就ては些の遺憾の點を見出さないほどの、條約である。それは何にも知らない幕府の役人が、相手方に談判する身が殊に物を聞いて、さうして、條約原案は向ふが作つてくれたのを、こつちが修正し、こつちの思ふ通りにやつて、とう／＼こつちの志を遂げた。さうして、その翌年には日本から公使として、派遣されてゐる。公使が何者である乎といふことも知ら

ずして、條約を拵へてその翌年には、彼地に、公使が出掛けて行つた。實に早い。その間が、早くてときばきしてゐるのは驚くほどである。日本人には、平生癢に障るぐらゐ嫌やな人がゐる。もう日本人を辭職したいやうな、感じがする時があります。併しながら、今申すやうなことを、歴史に見て、世界どこの民族、どの人種にかういふ人種があらう乎、實に恐れ入つた、驚入つた、誠に、結構な人民で、我々もそのうちの一人であるといふことは、實に有難い次第である。人間と生れてこの日本國民といふことを、これほど仕合せなことではないと考へてをるのであります。

## 七 國史と日本人の進路

それからもう長いことはありませんが、もう一つ二つ申上げて見たいと思ひま



す。この日本國民には、随分と缺點があります。貴下方に、申上げ憎いことではあります、日本人も、神様でも佛様でもない。それで缺點もある。その一、二を申しますれば、一致結合といふことは、なか／＼出來ない國民であります。日本人が五六人も外國に行けば、必ず喧嘩をする。五人をれば三人と二人といふやうに、すぐに黨派を作つて、いがみ合ふ。英國人は、三人寄れば必ず新聞を拵へるといふことでありますが、日本人は、もう三人寄れば、黨派を拵へる。一方に好惡がある。あいつは嫌ひ、あいつはいけないといふことになつてをり、兎角に一致といふことが、どうも出來兼ねることあります。それから、第二は「歡樂にふける國民」といふことを西洋人も書いてをる。これは、どうもさうらしく思ふ。日本人ばかりではない。所謂耽溺を好むといふことは、日本人に限つたことではない。外國人はもつとひどいではないかと言はるゝ乎も知れぬが、他所は他所、日本人が歡樂に耽るといふことは、往々にしてある。それから、雷同

することもあれば、新奇に走るといふこともある。時としては、脱線することもある。それで、新奇に走る時には、種々なことがある。維新の時などは、御承知の通り、佛様まで焼いて終ふに骨が折れた。佛様の處分に困つたことがある。何も彼も壞して奈良の南圓堂といふものを、壞すといふことに極つたけれど、壞すに金がかゝるので、致方なしに壞さずに置いた。今日では、誰も南圓堂と云うてをるが、もうなくなつてしまつてゐる。さういふ風に脱線することも、多くある。併しながら、これらの缺點があるに拘らず、なほその缺點に堪へて行くといふことは、何である乎と言へば、如何に日本人は、同志喧嘩をしても、皇室といふものを、中心としてゆく時は、みんな一致するのであります。維新の時は、或は佐幕と勤王との兩論に分れたけれども、天子様に弓を引くといふ考へは誰も持つてはゐなかつた。その時に若しこれが他國であつたなら、或はフランスと同盟した者も出來たのであらう。或る者は英國と同盟したかも知れぬ。或者



はロシアの力を借りることも出来ないことはなかつたのである。併しフランスも力を貸さうといつて、現に金も軍艦も貸さうといつたことがある。英國なども、機會があれば、力を貸すことを辭せなかつたのであるが、維新當時の人は、外國の力を借りて、うちで喧嘩をする時には、將來が思ひやられるといふ考へであつたのであります。即ち天皇を中心として國家を目的とした時に於ては、互に敵視してゐながらも、總ての敵愾心を捨て、しまつて、共同一致するといふことで、維新の大改革は出来たのであります。而してこの精神によつて廿七、八年の日清戦争は出来たのであります。又たこの精神によつて、卅七、八年の日露戦争も出来たのである。この團結の出来ない國民も、皇室といふものによつては、如何なる場合でも、團結が出来るといふことが、大なる光である。我々はこの光を千古に輝かすべきものと思ふのであります。

それからもう一つ申上ぐることは、日本國民といふ國民は、時としては、なかなか弱蟲である。どうもかう不景氣では困るぢやない乎、もうとても遣り切れないといふ風に時としては、弱り込むこともある。併しながら如何なる場合でも、彈力がある。即ち彈き返す力がある。一寸一時は困るやうなことがあるけれども、直ぐに彈き返す力がある。この彈力といふものが日本帝國國民の特質である。これが、あるが爲めに、如何なる場合でも、日本國は日本國として立つてをるのである。即ちこの彈力によつて、鎌倉時代の蒙古の大軍を退けることも出来たのである。この彈力によつてロシアと戦ふことが出来たのである。恐らくは、この彈力によつて、將來世界の覇權を握つてをるアメリカ合衆國とも戦つて、決して負けぬだけの覺悟を持つて行くことが出来るであらう。この彈力、これが日本國民の寶である。これがない以上は、日本國民は、駄目である。私はさういふ點によつて、皆様方が日本帝國の歴史といふもの、有難さをお考へになつたら、失望もいらない、落膽もいらない、眞に貴下方の前には、公明正大なる大きな道が開けて



をる譯である。その道を横行濶歩して行くことが出来ると思ふのであります。最後に一言申し上げておきますが、貴下方はこの日本は舊國とお考へになるかも知れませんが、日本の歴史は、さうでない。なるほど日本の皇室は世界唯一の古い皇室であり、又た世界第一の由緒ある皇室ではある。併しながら、日本帝國は老ぼれの國ぢやない。日本の歴史は三千年であります。本當にこれを、歴史の上に書いたものから考へて見れば、二千年漸くのものである。支那の歴史の如きは、六千年、殆んど日本の三倍の長い歴史を持つてをる。我が日本國民は、まだ青年の國民である。實を云うて見れば、外國との交渉といふものは、すこぶる少く、世界に顔を出したといふのも、漸くに最近百年ぐらゐのものである。さうして見れば、日本の歴史は、我々に向つて日本國民は尙、青年であるといふことを教へるのである。その青年といふものは希望があり、且つ大いに努力しなければならぬ。又た自ら進んで、運命を開拓しなければならぬ。私は今申上げた歴史に

よつて考へて見ますれば、日本の將來の歴史は實に前途洋々春のごときものがあると考へて、寔に貴下方と共に大いに人意を強うするもので御座います。聊か私の研究致しましたる一端を申上げて、皆様方の御參考に供しました次第で御座います。

(昭和六年十月十七日、津山市津山實科高等女學校に於て)



## 歴史上より見たる日本と支那

### 一 緒 言

満堂の諸君、只今當縣長官閣下より、寔に御懇篤なる御紹介の言葉を頂戴致しまして、慚惶交々到ると申しても、宜しいと思ひます。私は決して長官閣下の申されたやうな者ではありません。併し自分の理想とする所は、さうありたいと思つて居る次第であります。

私は、只今蘇峰會神戸支部長の御紹介になりました通り、『歴史上より見たる日本と支那』といふ事に就いて、申上げて見たいと思ひます。約一時間位申上げたいと思ひますから、出來得る限り、どうぞお静肅にお聴取りを願ふ次第で御座います。實を申しますと、私は演説家でもなく、演説好きでもない、已むを得ず演説をす



るのでありまして、然かも數日來續けて演説を致してをりまして、今夕は甚だ聲を出すのに惱んで居りますから、或は隅々までお聞えにならぬかも知れませんが、兎に角私は最善を盡すつもりでありますから、どうぞそのお積りでお聴取りをお願い致します。

## 二三つの隣國

我が日本國は、三つの毛色の違つて居る隣國を持つて居ります。向ふ三軒兩隣りと申しますが、日本の三つの毛色の變つた隣國といふものは、何處である乎と申しますと、第一は支那であり、第二は露西亞であり、第三は米國であります。何れの隣もたゞの隣でない。餘程考へなければならぬ隣家であります。或る隣には壁を作る必要があり、或る隣には壁よりも城の方が必要ではない乎と思ふやうな所もあり、或る隣には、濠を掘らなければならぬ所もあるといふ様に、謂はゞ油

斷の出來ぬ隣國を持つて居る次第であります。其の順序から申しますと、米國が一番新らしい所の隣國であり、次が露西亞である。支那に至つては日本の有史以前からの隣國であります。何千年前からであるか、はつきり判らないが、尠くとも日本の開關の時には、既に支那と若干の交渉があつた事であらうと思ふのであります。

日本と支那とは、同文同種の國であります。詰り同じ所のものが、一方は日本といふ名が付き、一方は支那といふ名が附いてをるだけであつた。そこで支那と日本との名を取つて仕舞へば、同じ物であると、或はお考へになるかも知れませんが、併し之は全くの間違ひであります。日本と支那とは如何に書くところの文字は同じであつても、如何に顔の色が同じ色であつても、之は全く別なものであります。

一體日本の支那に對する政策の根本的間違ひは、此處にあります。日本人が支那



人を見ること、己れを見るが如く思つてゐる。日本國が支那國を見ること、日本と同様に思つてゐる。故に今日の間違ひは、其の結果であると思ひます。

### 三 日本と支那の相違

私は茲に歴史より見たる日本と支那との事に就きまして、如何に此二つの國が違つて居る乎を申上げて見たいと思ふのであります。古き事を申しますのは、故きを温ねて新しきを知る所以であります。即ち今日の事象に就て、皆様の御研究になる材料を差上げる爲めであります。日本と支那とは根本的に相違してゐる。即ち根本的に違つてゐる。其の第一を申しますと、國體が違つてゐる、國といふもの、體が違つて居るのであります。日本は御承知の通り、萬世一系の帝國であります。日本は即ち皇室が本であつて、

さうして皇室を中心として、國民が段々成長して來たのであります。支那は其逆であります。支那には、天子様が楯で量る程あります。従つて萬世一系など、言ふ事はありません。長くて八百年——周の時代が八百年——といふ事でありませんが、之は唯だ名ばかりであります。大概三百年、短かい時には百年——五十年といふ風になつて居るのであります。然かも支那の天下は、力の強い者でさへあれば、誰でも天子になれるのであります。泥棒の親玉でも天子に成れるのであります。即ち莊子といふ人が言つたのには、「物を盜めば誅せられ、國を盜めば王様となる」と。所謂泥棒の一番大きなのが支那では天子様である。日本では夫れが全く逆である。日本の政治家は、如何なる偉い政治家でも、總理大臣になるといふ事が理想の極致で、總理大臣以上にならうといふ考へを持つ人はありません。日本では天位といふものは、嚴として冒すべからざるものであります。然るに支那はどうである乎と申しますと、腕さへあれば、何時でも天子に成れるといふ考



へを持つてゐる。近い例は、袁世凱を御覽なさい。此漢が既に天子に成りかけたのであります。洪憲皇帝といつて、もう年號までも拵へて、天子に成りかけてゐたのが、我が大隈内閣の時に反對せられて、たう／＼成り損なつたのであります。斯の様な譯で、第一に國體が違つて居るのであります。私が申します支那の天子といふものは、恰も帽子の様なものであります。何時でも取代へる事が出来る、又た何時でも取代へらるゝのであります。日本の天皇といふものは、頭であります。同じ上に戴くものでも、頭と帽子とは違ふ。それで日本の頭、支那の帽子、どつちも昔は天子様が居られたでは無い乎といふけれども、支那の天子様は帽子であるから、即ち時としてカンカン帽になる事もあり、時としてはシルクハットになる事もあり、時としては烏打帽にもなる。日本では天子様が首でありますから、日本の皇室が無くなる時は、日本といふ國がなくなる時であります。是だけ根本的に國體が違つてゐる事が判ります。

夫れで支那の歴史を讀んで見れば、支那の君主と國家との關係は宿屋と旅客の様なものである。即ち入り替り立ち代り、出たり入つたりしてゐる。日本の國家に於きましては、豫め家があり、家主といふものがちやんと決つてゐる。日本では其の家主といふものが、畏れながら天皇陛下であります。如何なる場合に於ても、家は家主が持つてゐる。家主といふものは、親から子に、子から孫に傳はつてゐる、即ち萬世一系であります。宿屋といふものは、如何である乎と言へば、今日は鞆を提げて來る者があり、明日はトランクを持つて來る者があり、又た、一泊か二泊かで行く者もある。時としては宿錢を拂はずに出て行くものもありません。それからもう少し手近い事に就て申上げて見たいと思ひます。

#### 四 壓迫に慣れた支那國民

元來日本人は武に長じてをり、支那人は文に長じてをります。日本人は未だ曾て



他所の國に征服されたといふ事は、一度もないのであります。日本の歴史あつて三千年、未だ曾つて他の民族が來て、我が大和民族を征服したといふ事は無いのであります。成る程時としては、日本の一部を取らうとしたものはある。併し夫れは日本人が追つ拂つたのであります。それで未だ曾て日本國の領地である所の、一つの石でも、一つの土塊でも、他國に奪はれた事はないのであります。

然るに支那は如何である乎と申しますと、常に取られてゐる。所謂る時によつては、全部取られてゐる。時によつては一部分取られてゐる。何れにしても、取られてゐるのであります。それで支那人は人を征服したといふ考よりは、人から征服されたといふ考を、始終持つてを、征服されるといふ事が、當り前の様に思つてゐる。之は歴史上の事實であつて、殊更に事實を構造して申上ぐるのではありません。支那に於ては強い者と戦争をするといふ事は、馬鹿の骨頂であることになつてゐる。弱い者は必ず負けるといふ事になつてゐる。強い者が必ず

勝つ、勝つ者は必ず天子に成るといふ事が、原則になつて居ります。夫れで支那の歴史上に於て、少し學者臭いお話では御座いますが、漢民族が一番力の延びた時代は漢の世と唐の世とであります。特に唐の時代は、漢民族の全盛であつたのであります。併しながら其の時代に於ても、漢の高祖といふ人は、白登城といふ所で、胡のために圍まれた時に、之はどうも仕様がないから、計略を以て漢の方から非常な美人を、賄賂に遣るといふ事を申送つた。所がそんな美人を遣られては遣り切れないといつて、胡の大將の奥さんが、早く兵を率ゐて歸るがよからうと、その主人に勧めて、歸らしめてしまつたのであります。即ち漢の計略が當つたのであります。唐の時に於ても其通りで、唐が天下を取つた時にも、皆んな胡の兵隊を引張つて來て、亂を平げて居ります。其後で胡が追々盛んに成つて來ました。彼の安祿山など、いふのは、あれは胡の人でありまして、唐人ではないのであります。支那に於ては皆な偉い戦をした人は、他から兵隊を借用して來た



のでありまして、支那人自ら戦をしたといふ事は、全くないとは申しませんが、甚だ尠くありました。

### 五 支那の戦争

夫れで支那の戦争の仕方は、如何である乎と言へば、正々の旗、堂々の陣と申しまして、丸で今日廣告屋が歩くやうな遣り方でありませぬ。太鼓を打ち、旗を立て、銅羅を叩き、お幟りなどを翻して、丸で活動の廣告屋でも歩くやうにして戦争をしてゐたのであります。さうして支那では戦争と言つても、本當にするのではない。丁度觀兵式のやうなもので、向ふで旗を三本立つれば、此方は五本立てるとか、向ふで太鼓を三つ叩けば、此方は五つ叩くといつた風になつてをりまして、旗の數や太鼓の數が多いといふ事が、強いといふ事になつてをります。夫れで支那では眞面目に戦争をする事はない、丁度演習のやうなものである。之は私

が支那人を見くびつて言ふのではありません。近い例を申しますれば、支那の長髮賊の亂の如きものを、どうして平げた乎と申しますと、英國からゴールドン將軍を頼んで来て、其力によつて平定したのであります。日清戦争の時にもモルレンドルフなど、いふ獨逸人を雇つて來てゐるのであります。之は支那の御流儀だから良いとも、悪いとも言へないのであります。

そこで日本人と支那人とは、喧嘩で例を引いて見れば、一番よく分ります。日本人は口より先の手が出て來るのであります。或は下駄を脱いで、其の下駄を武器にして殴るのであります。今日では靴を穿いてゐるから、直ぐに靴を脱いで殴る譯にはいきませんが、その代り腕で直ぐやりつけます。支那では喧嘩といつても、なか／＼さう手は出さないで、双方で滔々と、何だか私共には分らないが、盛んに辯じてゐる。さうすると種々な人がそれを取圍んで、見物をするのであります。さうして互に直接行動には移らずに、其の周圍の人々に向つて、いろ／＼



と喧嘩の理由などを話かけてゐるのは、丁度今日の國際聯盟に於ける支那の遣方の様なものであります。

## 六 支那人の空理空論

是は支那の御流儀だから致し方はありません。併しながら夫れ程に支那人は辯説に秀で、武に短なる代りに、實に文に秀でゝゐるのであります。凡そ世界に於て支那人ほど、文に秀でゝゐるものはないのであります。支那人は所謂の堅白同異の辯であつて、鸞を鳥と云ふ事も出来る。馬を鹿と言ふ事も、鹿を馬と言ふ事も出来るのであります。支那人の口ほど調法なものはないのであります。之は決して今日に始つた事ではないのであります。皆様方が、『左傳』といふ本をお讀みになつても、『戰國策』をお讀みになつても——これ等は何れも我が神武天皇の紀元前後に出来た本でありますが——如何に當時の支那人が、口から先に生れて來た人

種であるかゞ分ります。實によく理窟を言ふのであります。あの位に言へば、同じ嘘も美術的であります。即ち其嘘が綺麗でお菓子の様であります。其の綺麗なお菓子をまんまと食はされてゐる國もあるのであります。是は不思議でも何でもないのであります。

日本人は理窟を言ふ事が下手ばかりでなく、其の理窟を考へ出す事も餘り上手ではないのであります。是は残念な話であります。尤も日本には立派な文學があります。『萬葉集』の様なものもあれば、『古今集』の様なものもあります。歴史としては、『古事記』もあれば、『日本書紀』もあり、或は『源氏物語』の様なものもあり、或は『枕の草紙』の様なものもありまして、なか／＼日本の文學にも立派なものがあるのであります。併しながら打明けて申し上げますれば、日本人は理窟を言ふ事の下手なばかりでなくして、物の道理を考へる事も、餘り上手ではないのであります。是はどうも致し方はない。私は決して支那人におべつかを言ふのではない。



併しながら今日の支那人が、鷲を鳥と言ひ、馬を鹿と言ふ様な事を平氣で言ひ得るのは、決して一朝一夕の事ではないのであります。

支那人は實行は下手なのであります。併し理想に於ては世界第一であります。凡そ世界の凡有る理想といふものは、殆んど支那人が持つてゐる。皆さんの御承知の通り、支那人は航海の術も發明したのであります。火薬も發明してゐれば、磁石も見出してゐます。又た天文学も創めてをります。凡有る文明の利器を發明した計りでなく、孔子様のやうな常識論者もあり、又た老莊の様な虚無説もあると言つた様に、凡有る思想、プラグマチック、即ち常識論の哲學、或は共產主義といつたやうな、凡有る主義主張といふものが、支那には悉くあるので御座います。露西亞人が行ふものでも、獨逸人が考へる所のものでも、佛蘭西に行はるゝ議論でも、英國米國が主張する所のものでも、皆な支那人の畑に一度は其苗が生へてをるのであります。私が支那人を最負する様に思はれるかも知りませんが、歴史

といふものは、公平でなくてはなりません。支那人の悪い事は悪いと言ふべきであります。善い事は善いと言ふより外はないのであります。

夫れで御承知の通り、歐羅巴に行はれた自由説の如き、即ち佛國革命前に行はれ、若くばウォルテル、ルーソーなどの議論は、皆な支那から一度歐羅巴に來て、夫れから西洋のレットルを貼つて、東洋に逆輸入して來たのであります。丁度私は大森に居りますが、大森といふ所は、淺草海苔の本場であります。それで大森の停車場に朝鮮行の荷物が澤山積んであるのを見て、私は此處から海苔を積出すのだと計り思つてゐましたら、夫れは皆んな朝鮮に送るのではなくして、朝鮮から大森に著いてゐるのだと云ふ事で、朝鮮から大森に來た其の海苔に、淺草海苔のレットルを貼つて、さうして朝鮮に逆輸出するのだといふ事を聞きまして驚きました。夫れと同じ事で、東洋の思想を西洋に持つて來て、さうして西洋の色に染めて、是を東洋に逆輸出してゐるのであります。是は決して十八世紀ばかりでなく



して、十九世紀も其通り、米國の哲學者であるエマーソンも、其の思想の泉は焉ぞ知らん東洋から持つて來たのであります。東洋と申しましても、日本ではありません。印度若くは支那であります。就中支那であります。

### 七 行ふの要なき道德論

併しながら茲に又た一の不思議な事があります。支那人は今申しました通りに、理論専門、理窟専門で、それを行ふとか、行はないとか言ふ事は問題ではない。道德論さへすれば、其の道德を行はなくても好い。其の道德論をする者を、道德家と言つてゐる。即ち其の道德を行ふ必要を、支那人は認めないのであります。支那人は實に不思議な人間であつて、頭の造り方が違つてゐるのである。頭が丁度机の中の抽斗の様なものになつてゐる。一つの抽斗には道德が入つてをり、次の抽斗には不道德が入つてゐるといふやうに、幾つもの物が入つてゐる。日本人で

はどうしても夫れが出来ない。日本人の頭は必ずしも其通りとは行きませんが、日本人としては言ふ事を行ふといふ事が、其の通則であります。支那は言ふ事は言ふが行はない。例へば人の頭を殴つて置いて、俺は知らぬ、手が殴つたのである、人を蹴り飛ばしても、何に俺が知つた事か、足が向ふに突き當つたのであるといふ調子であります。夫れでありますから、道德論は立派に遣つてゐる。誰も遣つてゐるが、但だ夫れを行はないだけであります。支那人に感心する事は、世界一の立派な事を言ひつゝ、世界一の非立派な事を行つてゐる。實に不思議千萬なる民族であります。例へば日本では、悲しい時でも泣かないといふ事が男といふものである。心の中では實に涙を湛へてゐる。けれども齒を食ひしばつても、涙を出さず辛棒してゐる事が、日本では男としてゐるのであります。所が支那では友達が死んでも泣かねばならぬ。親が死んでも泣かねばならぬ。兄弟が死んでも泣かねばならぬといふ風になつてゐるが、どう考へても涙が出ない時に



は、支那では専門に泣男といふ商賣人が居ります。泣く事を一つのプロフェツシヨンとしてゐる。其の専門の泣男を雇つて来て泣いて貰ひます。金さへ出せば、涙を買ふ事が出来ると言ふ様な譯であります。成る程黒い着物も着てゐれば、腕には喪章も付けてゐる、さうして三年喪をやつてゐる。着物さへ三年喪であれば、心はどうでもよいといふ事になつてゐる。日本では五十日精進であるが、支那の様に三年喪など、言つて、三年も肴を食はなければ遣り切れぬとあつて、精進五十日としてあります。それを精進落とか、精進あげなど、言つて、日本人は正直なもので、自分は行ふもので、少くとも行はんとする事でなくては言へない。初から行はない積りで、白々しく言ふ所の日本人は、夫れは支那人の混血兒である。若しさういふ人があれば、寧ろ國替へをした方が良いのであります。

### 八 論語逆讀みの支那

私は支那には三度程行つた事があります。私はたつた三度位しか支那には參つてをりませんが、併し支那の本は餘程讀んで居ります。私の一番好きなものは支那の文學、英國のもの、米國のもの、是が一番好きであります。不幸にして露西亞の字が讀めないの、露國の事は他の外國語の翻譯で讀むより外仕方がありませんが、米國、英國、若くば支那のものに於ては、及ぶだけ研究してゐる。それ程好きであります。現に私は少くとも、數萬卷の本だけは藏してをりますが、其の大部分は支那と英國の本であります。夫れほど私は支那の文學、支那の學問、支那の文明に敬服してゐるのであります。併しながら不思議でたまらない事は、支那人は我々を教へてはくれるけれども、自分では行はない。夫れで支那の實際を考へて見ますれば、私は常に申す事でありますが、『論語』を逆様に讀むが一番良い



即ち「論語」を逆様にさへ讀めば、支那の事は、よく分るのであります。例へば「君子欲<sub>下</sub>訥<sub>ニ</sub>於言<sub>一</sub>、而敏<sub>於</sub>於行<sub>ト</sub>」とありますが實際は其逆であります、即ち「欲<sub>下</sub>訥<sub>ニ</sub>於行<sub>一</sub>、而敏<sub>於</sub>於言<sub>ト</sub>」と言ふ事になつて居ります。是では嘘ばかり言つてゐる様なものであります。日本との條約も種々出來て居りますけれども、其の一箇條も實行しないのであります。そこで言に敏であつて、行に訥であることが分ります。或は「過則勿<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>改<sub>レ</sub>」と言つて居りますが、支那人ほど負惜みの強い者はない。支那人ほど過つて改むる事をしない人種はありません。即ち孔子様の言つて居られる事と、逆になつてゐるのであります。斯う云ふ事を申上ぐれば、まだ數限りもないのであります。「己れの欲せざる所を人に施す事勿れ」と孔子様は教へて居りますが、御覽なさい、支那は常に我が日本に對して非買同盟をやつて居ります。若し日本人が支那人に對して、非買同盟をしたら何といふのでありませう乎。然るに自分の方ばかり、己れの欲せざる事を人に施して居るのであります。本當に逆であります。總て支那人は斯う言ふ有様であります。支那の所謂る文化政治といふものは、日本の實行政治とは、非常に違つて居ります。私はどつちが良いとか悪いといふ判断を申すのではありません。其の判断は皆様方が御隨意にお定めになつてよろしい。唯私は材料だけを提供申上げる次第であります。

### 九 日本と支那の特色

元來日本といふ國は、何處迄も單純に行くといふ事が、其の流儀であります。時としては西洋にかぶれ、時としては支那にもかぶれる。即ち繁文褥禮になつて、事が六ヶ敷くなつて來たり、うるさくなつて來るのであります。併しながら、廳ては又た元に還つて來る。即ち單純になつて來るのであります。支那は何處までも複雑で、何處までも物が重なるやうであります。日本は又た何處までも單純であり、何處までも素朴であり、何處までも飾らない所に妙味があります。日本の



美の極は、即ち畏れ多い事ながら、伊勢の大廟の様なものであります。別に描いてもない、彩つてもない、ほんの其儘の木地を其儘にして、家を拵へてあるのでありますから、其前に行けば、有難くて涙がこぼれるほど、我々は感激するのであります。茲に日本の美の極致があります。然るに支那ではどうである乎と言へば、支那では木を木の儘に用ふるやうな事はない。支那人は何處迄もべたべたと塗るのであります、其塗り方が悪どく、何とも言へないほど塗つてゐるのであります。そこに支那人の美といふのが出来て居るのであります。支那では昔から複雑性を帯びてゐるが、日本では單純である。支那で五千年も前に出来た彫刻などの立派な事、到底今日の文明人が企て及ぶ事の出来ない程の物を拵へてゐるのであります。そこに支那人の所謂特色があります。即ち漢民族の特色があり、特長があるのであります。日本の國でさういふものも、どうやら支那人の眞似をすれば出来る。日本人は器用な民族であります。併し日本人の本色、特色といふ

ものは今申しました通り、素朴であり、少しも飾らない所にあります。天真爛漫な所にあります。即ち日本で一番の美といふものは、前に申した伊勢大廟、さういふ所に日本の所謂特色を見出すのであります。

是は單に今申したものの計りでなく、料理のやうなものでも其通りであります。支那人の料理を御覽なさい、とてもおいしいものであります。私は支那料理の禮讚者であります。料理はともかくも、食べる事は好きな人間であります。併しながら支那料理は、出てゐるのを見ると、何を食べて好いか分らないが、口にすると總ておいしい。併し其の原料といふものは、皆様方がお考へになつても分らないのであります。字引を繰つて見ても分らない。何を食つてゐるかも分らない。即ち分らない様に、支那の料理ではいろ／＼の物を混せて仕舞つてゐる。物の質を失ふほどにしてあります。所が日本の御馳走はどうである乎と申しますと、日本人が最も技巧を凝らした御馳走は、天ぶらであります。天ぶらが出来上つた所



を見ますと、海老が衣物を着て居りますが、丸で田舎の村長さんが、フロックを着てゐるやうに、折角日本人が技巧を弄して、海老を隠さうとして揚げた結果は、ちゃんと分つてゐる。折角技巧を弄して刺身を拵へて見ても、赤い色は必ず鮪といふ事が分ります。又た白いものは必ず鯛とか、鱈といふ様なものでありまして、日本の料理は胡麻化す事が出来ぬのであります。支那の料理はどうも致し方はない、何と言つても分らない。是は燕の巢であるさうだと言つても、何處が燕の巢である乎といふ事が分らない。たゞ食べて見ておいしいだけであります。私は日本の料理が良いといふのでもない、支那の料理が悪いといふのでもない。併しながら料理を見ても、支那と日本の國民性がはつきり分つてゐる。唯だ彼等は上海から向ふに居るから支那人で、長崎からこつちに居るから日本人だなど、考へてはいけない。根本から違つてゐる人種である。長所も短所も、生れた時から違つてゐるのであります。

### 一〇 日本の改革と支那の改革

夫れで日本の改革といふものは、どういふ事が改革乎と言ふと、總て日本人は外國の眞似をどん／＼遣つて、複雑になつて來るのであります。ところがさうすればする程、元の奎阿彌に戻つて來る。御承知の通り、王朝の昔、隋唐の文明を摸倣して、あんまり日本人が支那臭くなつて仕舞つて、其の結果が鎌倉時代の武家政治となりまして、彼の『貞永式目』が出来たのであります。それから世の中が變つて、徳川時代になつてから、大變うるさくなつて來てをります。様と言ふ字を書くにも、十通りも、廿通りもあります。此人には斯う書く、彼の人には斯う書くといつた様に、字引でも一つの様といふ字を書分けるには、十二通り以上もあります。殿も其通り、殿様に對する殿と、子息に對する殿とは、大變に違ふ



のであります。さういふ譯でありまして、うるさくてく堪らないと言ふ時代に、王政維新といふものがあつて、總てのものを叩き壊して、さうして萬民平等といふ事になつたのであります。夫れから更に六十年間ばかりの間に、又た種々な事を遣り出したから、今日になつて、行政整理など、言ふ事を遣つて居るのであります。總て手数を少くするといふ事が、日本の改革であります。即ち日本人は一元主義であります。現今政黨内閣など、言つて、互にぐずぐず言ひ合つてゐるけれども、總ては政黨内閣の夢も醒めて、皇室中心主義で進んで行く時代も來るだらうと思ふのも夫れであります。今ま政黨内閣を止めようといふのではありません、さういふ時代が何時かは來るだらうといふだけであります。

日本は斯う云ふ風でありますが、支那はさうでない。六ヶ敷く遣る事が支那の改革であります、實行しない國民性でありますから、幾ら六ヶ敷く遣つても、差支ない譯であります。幾ら手数を掛けても、幾ら手続きを六ヶ敷くしても、夫れは

表向きの事であつて、裏には裏があるのであります。さういふ風で支那の改革は、物事を六ヶ敷くする様になつて居ります。夫れで斯う云ふお相手と相談するには可なりうるさいのであります。互に手を取つて話す杯と、さう淡泊には行かないのであります。支那人には、所謂る武力といふものが無い。先に申した通り孫吳の兵法があるにはあるが、此の兵法は理窟であつて、支那人は是を實行しないだけであります。丁度儒教主義を支那人が考へ出した様なものである。日本人は儒教主義を考へ出す程の頭は持たない。併し儒教主義を實行したのは日本であり、孫吳の兵法も同様で、實行したのは亦た日本人であります。さういふ譯でありますからして、支那人は今申した通り、初めから行はないといふのが特色で、日本人に對してばかり誠意がないとお考へになつてはいけません。日本に對して行はないばかりでなく、自分自身が行はない所の民族であります。斯言ふ民族と隣り合つて居ると云ふ事は、どうも致し方はないのであります。けれどもこつちが國



替へすると言ふ事も出来ず、向ふに代つて貰ふ事も出来なければ、是れはこつちも覺悟を極めなければなりません。

## 一一 支那の外交手段

今申しました通り、支那人は嘘を吐くといふ事が一つ、尊大即ち威張ると言ふ事が一つ、嘘を吐いて威張り散らす、斯う云ふ事が支那人の流儀なのであります。日本人は一生懸命色々な事を研究するが、支那人はさうではない。威張る、騙す、欺く、銜ふ、誇る、斯う云ふ事を武器としてゐる。丁度我々が毒ガスを用ひたり、煙幕を張つたりする様に、支那人は舌を持つてゐる。支那人は即ち蘇張の辯三寸不爛の辯でやつてゐる。是が即ち支那人の武器であります。其の武器を知らずに、やられた一番の正直者(?)が、豊臣秀吉といふ漢である。私は秀吉を決して正直者とは言はない。併し秀吉も矢張り日本人であつて、支那人は矢張り自分

同様なものであると考へたかも知れない。秀吉は日本人の中では正直な者とは云へない。好い加減な横著者だと信ずる。併し彼も支那人に對しては、大正直者でありました。即ち彼は明人から種々の事を聞いて、其通りを考へてやつたが、扱て明人が來て、其の書附を見た時には吃驚して、流石の秀吉が一杯食つたのであるから、秀吉ほどの横著な漢でも、支那人から一杯食はされたといふ事は、已むを得ないのであります。

それから明治の時代になつてからも、日本は支那から度々食はされて居ります。即ち馬關條約に於て一杯食つたのである。夫れは如何である乎と申しますと、馬關條約は明治廿八年の四月、伊藤公と李鴻章とが談判してをります。其時に遼東半島を日本に譲るといふ事になつて、すつかり調印が濟んだが、もう其時には李鴻章は露西亞など、手を握つて、露國等から抗議が出るといふ事を知り抜いての行動である。伊藤公はあれほどの大政治家であつたけれども、矢張り李鴻章の古



狸に、一杯まんまと食はされたのであります。夫れから其後の事は餘りに近いから申しませんが、日本人は豊太閤でも、伊藤公でも、支那人からだまされてゐるから此の二人に及ばない者がだまされると言ふ事は、寧ろ當然の事であらうと思ひます。私はどうもだまされた事を咎むる事も出来ず、又ただました人を感心する事も出来ず、只だ諸君と共に苦笑ひをする外はありません。

## 一二 支那の國民性

夫れからもう一つあります。支那人の國民性と言ふものは、實に不可思議な所があります。所謂る支那の大學者の言に「恩を記して仇を記せず」といふ事があります。所謂る人から恩を受けた事は覚えて居るが、人から害を加へられた事は忘れて仕舞ふといふ事があります。しかし支那人は其逆であります。即ち「讐を記して恩を記せず」であります。彼奴は怪しからぬと言ふ事は、孫子の末までも覚えて置き、彼に恩を受け、種々と引立を受けたなど、言ふ事は、一切是を忘れて仕舞ふと言ふ風であります。是は如何にも致し方はない。是も支那の國民性であります。忘れる人に對してどうも恩を忘れてはいかぬと言つても致し方がありません。元來忘れると言ふ國民性を持つて居るのであります。

さて我々は明治廿七八年の戦役以來、支那の留學生を日本に連れて來て教育して、立派に一人前に仕立てゝゐるではない乎と申します。併し夫れは日本人同志の話で、お互同志の間には通用する文句であるが、お隣りの支那には、それが通用しないのであります。さう云ふ事を言ふ奴は、野暮の骨頂であるといふ事になつて居ります。然るに日本人は眞つ赤になつて怒つて、支那人は忘恩だと怒鳴り散してゐるが、支那人は夫れに對して痛くも痒くもない、夫れが當り前だと思つて居るのであります。

私は實に、日本人と支那人とは、どこまでも違つてゐると思ふのであります。支



那人は慘酷性を多分に持つて居ります。日本人は所謂武の人種である。併しながら武の人種と言ふものゝ、唯だ武力を持つて立つと言ふだけであつて、武士の情を知つてゐる。支那人は遊牧の民であつたと見えて、牛とか、羊とか、馬とか、豚とか、畜類を始終殺しつけてゐる爲めか、人を殺すなど、言ふ事を何とも思つてゐない。所謂殺生國民であります。日本人はよく植物性のものを食べてゐる。支那人はよく動物性のものを食べてゐる。夫れ程違つてゐるのであります。夫れで支那では人を食べるなど、言ふ事は、歴史上少しも珍らしくない。御承知の通り支那で料理の一番上手な易牙と申す、所謂料理の神様が、「これまでいろ／＼おいしい物を食べたが、何か違つた物が欲しい」とその君主齊の桓公の御注文に、思案の結果、自分の息子を殺して、其肉を蒸して料理して持つて行つたら、是は誠に結構といつて食べられたといふ事であるが、これ位の事は問題ではありません。併し自分の息子を殺して、其肉を食べさせるといふ事は、何と申し

ても、恐れ入らざるを得ないのであります。然るに支那は昔から人肉を醃にして食ふと言ふ事があつて、所謂人肉を鹽漬にして食べるのであります。現に韓信といふ人が、何故に謀叛した乎と申しますると、自分の友達である黥布の肉を鹽漬にして、恰も鮭の鹽漬同様にして皇帝から韓信に下さつた。それで韓信も考へました。御馳走は有難いが、次には自分も此通り遣られるだらう。同じ殺されるならば、俺も謀叛を遣つてやらうと言ふ事になつて、謀叛をしたのであります。支那に丁度元の時代に出来た『輟耕録』と言ふ本があります。夫れを讀めば、支那人がどう言ふ風に、人肉を食べた乎と言ふ事が能く判ります。私は大谷光瑞師の著された『食』も讀み、又た諸君も御承知の木下謙次郎氏の著書『美味求真』といふ本も讀んで、私も支那人ではないけれども、せめて理想でなりとも御馳走を食べたいと、種々料理の本も研究して見ましたが、併し日本人の書いた本には、未だ曾つて人肉の料理の仕方や其味などの事は、絶対に無いのであります。



然るに今申上げました『輟耕録』によつて見れば、支那人はなか／＼人肉を食つてゐる人種で、現に人の事を、双脚羊と言ふ名を付けてゐる。そこで人間や何乎を殺す事は、左程不思議な事とは思はない。夫れ位ゐるの事は何とも思つてゐないのであります。昔の『通俗漢楚軍談』時代ならば何でもないが、今日でも是を行つてをります。其の一例を申しますならば、楊宇廷は張學良の師友であるのに、張學良は楊宇廷を自分の家に呼んで、他の者に命じて殺させて居ります。是はさして珍らしい事ではない。夫れで斯う言ふ流儀でやつて居るのであつて、支那人はなか／＼徹底的にさう言ふ事を遣るのであります。

夫れで日本人の様に、何事も唯だ淡泊に、單純に、さう物事を六ヶ敷く考へずに遣つて行くと云ふ人種と、支那人の様に脂濃く、しつこく、うるさく、何時までも思ひ切りの悪い者との立會は、餘程是は考へなければならぬ事であります。私が一寸考へて見ますに、日本人は恰も蝗の様なもので、一時に偉い元氣で飛んで行くのであるが、何處をどう飛んで行つた平分らない。支那人は蝨ゴキウの様な人種で、一遍食ひ込んだら、馬に食ひ込まうが、犬に食ひ込まうが、食ひ込んだ所にくつ附いて離れないのであります。夫れで蝗人種と蝨人種とが、互に隣同志に居るのでから、蝗先生も餘程考へねば將來が危ないのであります。

### 一三 日本は如何に動く可き乎

私は色々な事を申上げましたが、只今まで申上げました事で、悉くを盡したとは思ひませぬ。併し兩國の歴史に現はれた民族性と言ふものは、略ぼ皆様方が御諒解下さつたであらうと存じます。如何にも日本人は偉い人種であります。今日私は日本と支那と申しましたけれども、日本の事を詳細に言へば、支那の事を詳細に言へないから、日本の事は略したのであります。又た日本の事は皆様方が百も御承知の事と思ひましたから、支那の事を詳しく申上げた次第であります。夫れ



で私の話はもう終りますが、日本は今申しました通りに、昔から種々と世界に向つて働きかけたのであります。一度は朝鮮にも植民地を置いて見たりなどしましたが、たう／＼天智天皇の御代に、朝鮮の植民地は引揚げて仕舞つたのであります。日本は又た戦國時代の後には、殆んど南洋群島にかけて、勢力を散布してゐたのであります。若し其儘にして置いたならば、ジャワ、スマトラ、セレベス、安南、暹羅、比律賓邊りに、日本人が今日では一大島帝國を形成して居る筈であつたのであります。夫れを引揚げて仕舞つたのであります。

然るに明治天皇陛下の御威徳に依つて、明治廿七八年に初めて遼東に志を得たのであります。所が夫れも李鴻章や何かの策に乗つて、駄目となつて仕舞ひ、とゞのつまり、明治卅七八年の戦役に於て、我が十萬の人士を遼東の野に殺し、我が廿億の金を遼東の野に費やし、やつとの事で我々が満洲に於ての權益を保障したのであります。然るに今日に於ては、もう満洲はうるさいから引揚げた方がよくはな

いかなど、論ずる人があります。是程私は情ない事は無いのであります。日本國民の、所謂三千年來の國民として我々の先祖よりも、尠く共一足か二足は先に進まなければならぬ。先祖の残したものを其儘受繼いで、其の財産が減る様な事をしては先祖に對して申譯が無いのであります。折角我々が世界に向つて、發展しかけた所の満洲に於ける權益さへも、うるさいから捨て、仕舞へと言ふ様な事になれば、此次には又た朝鮮を棄てる事になり、其次には臺灣を棄てる事になるであります。支那人は今申した通り、日本に向つて、其の満洲を返せ、臺灣を返せ、甚だしきは琉球を還せと、斯う言つてゐるのであります。況んや朝鮮を還せなど、言ふ事は何でもありません。

御承知の通り、支那人は所謂文化的帝國主義で、腕の力で稼ぐ事は出来ないから、朝鮮に向つても俺の屬國だと斯う言つてゐる。臺灣も屬國だと言つてゐる。さうして責任を問はれる時には、朝鮮は獨立國だと言つてゐる、人がやかましい



問題にすると、俺の物では無いと言つてゐる。人が立派に整理して物が出来上つた時には、是は俺の物だから戻して呉れと言つてゐる。實に餘りに蟲が良過ぎるのであります。今日の滿洲、是は支那の本國とは別だと言ふ事になつてゐる。現に孫逸仙など、言ふ人は、日本が俺に加勢をする時には、山海關は日本に遣ると言ふ約束迄してゐる。然るに國民黨の先生方は、昔から滿洲は自分の物で、昔から今日の様に、旅順も、大連も、南滿洲鐵道も、其の沿線も、みんな立派に開けてゐたかの如く思つて是を還して貰ひたいと言つてゐる。誰が一體今日の滿洲を拵へたのであらう乎、支那人は黙つて居れば、如何なるものでも捲き上げようとしてゐる。支那人に言はせれば、九州も是は上海に近いから俺の領地だと言ふかも知れない。現に御承知であるかも知れないが、明の永樂皇帝は我が阿蘇山に壽安鎮國山と言ふ名前を附けて居ります。この調子だと富士山にでも或は支那人が何とか言ふ名稱を附けるかも知れません。實に是は蟲の好い話としては世界第一で

あります。此蟲の好い支那人と親近し得るのは、唯だ御隣國の一つの米國合衆國だけであります。夫れで兩國はなか／＼仲が良い、是も致方はありませんが、我々は今申しました通り、日本には日本の國體があります。此の國體が日本の強味であり、又た此の武力といふものを馬鹿にしてはいけない。武力といふ事は、兵隊の力ではない。兵隊の武力と言ふものは、武力の一部分と言ふよりも、寧ろ一小部分であります。武力と言ふものは、即ち我々日本國民が、總て國家の干城に成ると言ふ精神、これが即ち私の言ふ所の武力であります。此の武力は、我々の様な老人でも、御婦人方は元より、貴下方でもお持ちになるものであります。此の武力なるものは、決して兵隊の力のみではないのであります。即ち國民がその國家を衛る所の精神であります。謂はゞ國體擁護力であります。茲に又た日本の特色があるのであります。

我々日本人は自分の長所を以て、向はなければならぬのに、なにも支那人の長



所を眞似る必要もない、又た支那人を日本人同様に考へる必要もない。支那人は支那人であります。「彼を知り己を知るは百戦百勝なり」とは、我々の先輩先祖が言つた言であります。私はどうか皆様方が支那の國民性と、日本の國民性が、此の如く違ひ、支那人と日本人とは、決して同じものではない、根本的に違ふといふ此の見地からして、總ての外交政策なり、或は總ての事を割出さなければならぬと思ふのであります。自分の考へて居る様に、支那を考へては、談何ぞ容易なるで、却々さうたやすく行くものでは無いと言ふ事を、聊か御參考までに申上げた次第であります。

(昭和六年十月廿二日、蘇峰會神戸支部大會に於て)

## 國史研究の急務

### 一 緒 言

只今藤井甚太郎君から、お話がありました通りであります。私が大日本國史會の會長になる杯といふことは、甚だ僭越ではありますが、皆様方の御差支へ無い限り、當分大日本國史會のことに、最善の努力を致し度いと思ひます。皆様方も十分私をお助け下さる様、御同情をお願い致して置きます。

此會を起すことに就きましては、私は古くから考へてゐたのであります。私が『國民新聞』を罷めた當時既に此會を考へ、手元には規則書などを作つてゐたのであります。早速此會にとりかゝらうと思つたのであります。意外にも大阪毎日、東京日々から、是非書いて貰ひたいといふ相談があつたのであります。私も種々



考へた末に、その相談に應じたのであります。そういふ譯でありますから、私が直に両方のものを同時にやるといふことは、なんだか二つの草鞋をはく様なことになりまので、此會の方は暫く延期を頼んで置いたのであります。

併し私と本山社長との間に取交しました契約書には、「國史の研究には、相當の助力をする」といふことが書いてあるのであります。國史會の無い時に、かういふ約束をするのは、可笑しいのであります。私は早晩これをやると思つたから、子はまだ生れないけれども、生れてからのことを考へてゐたのであります。

然るに今度外國からして國史に就き、又た其他に就き種々研究してお歸りになつた藤井君が、世界に於ける歴史に就いての、國民的覺醒と申します乎、動きを見つて歸へられました。そして此儘ではどうしても不可ない。お互にやらなければならぬといふことになつたのであります。そこで私も渡に舟で、宜しく願ひをするといふことで、遂に藤井君や皆様方篤志の御盡力に依つて、此會が出来たのであります。

であります。

兎角老人といふものは、座つてゝも、氣魄の衰へるものであります。藤井君に鞭撻されて斯ういふ事になつたのであります。思ふことゝ實行は、とかく伴はぬものであります。これを一の機縁として、何卒御遠慮無く、御鞭撻、御盡力のほどを、此上ながら宜しく願致す次第であります。

今日此の如き會の大切であることに就きましては、最早や彼は申上げなくとも、自明の理であります。皆様既によく御承知のことゝ存じます。

## 二 思想 國 難

併しながら私は今日に於きまして、思想國難と申せば、少し誇張の様であります。が、正直の所、國難では無い乎と思ふのであります。是迄とても、所謂思想國難が無かつたといふことではありません。如何なる時如何なる場合にも、邪まなる



考、間違つたことはあるのでありまして、今更出で來つた問題ではないのであります。併しながらこれ丈けの差別があります。即ち從來は悉くとは申しませんが、大概各自銘々の言ひ度いことを言ひ、聞き度いものはきき、受けたいものは受け、聞きたくないものは聴かず、受けたくないものは受けないといふことであります。

然るに今日に於きましては、決してさうではないのであります。積極的になつて來たのであります。此の思想に従はせ様として、日本に臨んでゐるのであります。各々の了見でやるのでは無く、一の大い組織せる團體、勢力を以つて日本に臨んでゐるのであります。申して見ますれば、昔はコソコソ泥棒であり、今度は元寇も同じであります。正々堂々日本を思想的に征服せねば止まぬ考を以つて日本に臨んでゐるのである。此方は聞き度くないから、聴かないといふのでは無く、聞き度なくとも聴かせるといふ了見であります。受入れたくなくとも、是

非受入れさせるといふ意見で臨んでゐるのであります。

これに對して吾々が如何なる覺悟、準備をしなければならぬ乎。これは餘程考へねばならぬことであります。敵を知り己を知ることが最も大切であります。今迄は敵を知ることが少かつたのであります。併し知れば知るほど我々の責任は大であります。今日軍事的國防は、海軍、陸軍があり、海軍には軍令部、陸軍には參謀本部があつて、それ々々對策を講じてをります。併し思想的には何處に參謀本部があり、何處に總指揮官があるのであります乎。これには甚だ心細く思ふのであります。

そらいふ譯でありますから、豫ねて皆様方と私が研究してをります、國史に返れといふことを、感せずして止む能はぬ次第であります。

少しく枝葉のことに亘りますが、申上ねばならぬことは、今日世界的の革命といふものを企て、ゐる者がある。世界的の一の團體、それは幸乎不幸乎知りませぬ



が、第三インターナショナルの露國であります。此の大本營から世界全國に向つて、總指揮を振つてゐるのであります。日本に於けるその方面の御連中も、その下にあり、日本の共産黨など、云ふのも、日本の共産黨で無く、世界革命の總本部たる露國の指揮の下に動く所の、一支部であります。日本のでないから、日本に悪いことは無いといふのではない。彼等は日本を捨てゝゐるのであります。日本を殺さうといふ考でかゝつてゐるのであります。それでないと革命の目的は達せられ無いのであつて、調べれば調べるほど、實にやり切れない状態になつて來てゐるのであります。

而して彼等の攻撃の要點は何處にある乎。攻撃の要點は誰々乎。これを調べますと、その要點は三つあるのであります。甚だ恐入つたことではありますが、攻撃の最大標點は第一皇室、所謂る國體を破壊すること。第二は家族制度、即ち從來の家族制度を破壊して、子をして父に背かしめ、婦をしてその夫に背かしむること

である。第三は經濟組織の破壊、これであります。即ち勞働爭議、小作爭議、學校の爭議、其他種々の爭議があり、その爭議の裏には、必らず赤い手が動いてゐるのであります。即ちこの三つのものが、攻撃の標點であります。

然るに今日、日本に於ては勞働爭議、所謂る經濟組織の破壊に對しては、一生懸命であります。かういふ風では、資本家がたまるものでは無いといふので、資本家が相談して、成る可くひどくせぬに若くは無いといふので、全國の商工會議所が集つて、十分とは申しませぬが、——やる中には手から水が漏れたりなどして、失態もあり、種々の困難なる事情も出來てをりますが——、兎も角防備が出來てをります。

然るに肝腎要の皇室擁護、家族制度を擁護することは、誰もするものが無いかと申しますと、少し言葉が過ぎますが、組織立つてする者が無いのであります。かういふ状態では、甚だ恐入つたことではありますが、天皇及び皇室を置去りにせぬか



と思ひます。此の言葉を申すことは、いゝ乎悪い乎知りませぬが、私は非常に心配してゐるのであります。

近き例を申しますれば、先年捕まつた、田中清玄といふ日本の指導者であります。そのお母さんは立派な基督教信者であります。心配の餘り、自殺をしてみます。普通の者ならば、親が自殺する程であるから、改むべきであります。私は田中ではありませぬからその心事を表白する天眼鏡を持ちませぬが、前後を考へますと、彼はそれに對して、なんとも思はぬのであつて、寧ろ本望の様に考へてゐるのであります。世の中の革命は、先づ家族の革命からといふ様に考へてゐるのであります。

### 三 國史に返れ

なか／＼この調子では困るのであります。それならば私共は如何に致すべき乎。茲に於て私は藤井君等の西洋に於て觀察して歸られたことに、同感するのであります。即ち我が「國史に返れ」といふことであります。我が國民の立脚點を、日本の歴史に立つることです。國史に心があれば、皇室も家族も産業組織も、自ら備はるのであつて、彼等の目指す所は充分の防禦が出来、更に進んでは世界に皇室の大を表し、世界をして我に倣はしむることが出来るのであります。

然るに今日遺憾に堪えぬのは、國史の研究は敵の利器となつてゐることです。即ち維新史の研究は敵の利器となつてゐるのであります。彼等は申します。維新の歴史など、鹿爪らしく云ふが、これは畢竟ブルジョアの革命である。武士階級が商工金持に倒されたのであつて、大きいことを云ふが、維新の慘劇、例へば水戸の浪士にしる、吉田松陰にしる、橋本左内にしる、皆な新しく勃興したる、商工ブルジョアの手先となり、ブルジョア資本家の犬鷹、——犬となり鷹とな



るものに過ぎぬ。それでは此次は何乎。此次は資本主義を倒し、勞農者の専制を立てる。維新のことは革命の一段であつて、第二段はこれから我々がやると考へてゐるのであります。維新の歴史をその調子で讀んでゐるのであります。近頃出たのを讀みますと、悉くとは申しませぬが、大部分はさうであります。

一寸一つの例を申してみますれば、奈良の大佛といふものは、日本の奴隸の血と涙とを以つて造られたものであるなど、いふ風に、歴史を讀んでゐるのであります。彼等は日本の歴史を埃及の歴史と思つてゐるのである。歴史と云へば同じものと思つてゐるのである。私は我々が折角研究しようと思つてゐる歴史、明治天皇の盛徳大業に依つて出来た歴史を、一家のブルジョア革命として抹殺し、第二のプロレタリア革命の階段など、いはれてはたまつたものではないのであります。併し彼等の解釋が世に行はれてゐるのであります。それはその筈である。彼等は

日本の歴史を讀まぬのであります。日本人といふことを自覺せずに、西洋のイロハを以つて當てはめて行くのでありますから、これはどうも止むを得ぬのであります。彼等の解釋するのは咎むる必要がありませぬが、雷同するのは不可ぬのであります。又た雷同するものを、手を袖にして傍觀するのは、甚だ遺憾に堪へぬのであります。

そこで私共は維新史に、別に新たなる見解を出すではありませんが、是非有りの儘の維新史を研究する必要があるものであります。これ迄の幾多の研究も、今申した精神に外ならぬのでありませう。

それでは私共は我が日本の國史に就いて、何を一番にする乎。それには私共は歴史を通じて、我が帝國の姿を眺めることが大切であります。各々一個人に個人性ある如く、國にも國家性があるのであります。即ち茲に於て、藤井君には藤井君の個性があり、私には私の個性があります。それと同様に佛蘭西には佛蘭西の國



家性があり、英吉利には英吉利の國家性があり、伊太利には伊太利の國家性があり、支那には支那の國家性があります。何れも個性の無い國は無いのであります。そこで我々は茲で日本帝國の個性は何處に在る乎といふことを考へて見たいのであります。

それに就いては第一立國の根源に溯つて研究すること、日本國運の推移に就いて研究すること、日本國家の現狀に就いて研究すること、この三つのものに就いて、我々は研究し、觀察しなければならぬと思ふのであります。即ち同時に國史研究會の目的は、大體申しますれば、日本帝國の立國、國運の推移、現在、この三つを持寄つて、綜合大觀することでありませぬ。これが此會の大なる目的の一つであります。

#### 四 歴史は動く

毎度私が申すことで、新しい意見ではありませんが、如何なる國でも、國の重なる要素は人でありませぬ。人間を去つて國家のことを考へられないのであります。然るに人間といふもの、これが又たどうもこれ程複雑のものは無いのであります。昔から孔子でも、ソクラテスでも、釋迦でも、キリストでも、種々の聖人、哲人、その仲間の佛様や、神様がありますが、併し彼等とても、人間に對する謎の一部分は解いたでありませぬが、總ては解かぬのであります。結局人間は謎であります。とても解らぬのであります。六ヶ敷いものである。何故解らぬ乎といふと、複雑してゐるからであります。この人間は解らないといふ偉大なる適切な證據の一を申し上げますと、丁度獨逸が一番盛んな時に、モロツツ問題が起つて、獨逸と佛蘭西と争つたのであります。獨逸が佛蘭西を盛んに虐めてゐたのであります。



其時英國では自由黨の政府が、政權を執つてをりました。然もその自由黨の中で、最も有力なる一人である大藏大臣のロイド・ジョージ、この人は非常に平和主義の人であつて、陸海軍の擴張には常に反對してゐたのであります。反對と云つて、陸海軍を止めてしまふのではありませんが、社會的には使ふが陸海軍に金を出すのを惜しんだのであります。陸海軍に金をやるのは、溝の中に金を捨てる様に考へてゐたのであります。

英國の政府は思切つて仕事をしたいと思ふが、政黨内閣に於て、その大藏大臣は甚だ勢力があり、總理大臣も、陸海軍大臣も大藏大臣の鼻息を窺つてをり、大藏大臣は國民の鼻息を窺つて居る。ところが英國の人々は戦争が嫌ひであります。嘗つて獨佛關係切迫の際奧齒に物が挾つて、言ふことも言はないでゐるといふ有様で、危機一髪の時でありました。その時の内務大臣、ウインスタン・チャーチル、この人も一種の人物でありますが、或日このチャーチルが、大藏大臣のロイド。

ジョージと途中で出逢ひ、二人で歩きながら役所に行く途中で、ロイド・ジョージが突然「時に僕は倫敦市長の大宴會に招かれてゐるが、そこでかう云ふ演説をしようと思ふ。若し獨逸が何處までも佛蘭西をいじめるならば、英國は黙つてゐないといふことを云はふと思ふがどうだらう」と云つたので、内務大臣チャーチルはこれを聽いて、青天の霹靂の如く驚いたのであります。そこで「君はいつそういふことを考へた乎」「實は今考へた」といふことであつたのであります。それから數時間の後にその演説があり、歐羅巴の視聽をびり／＼させて、その爲めに戦が無くて済んだのであります。

當時獨逸の駐英大使メデルニヒは、十ヶ年も英國に居て、英國通であり、英人からも親しまれ、獨逸皇帝からも信任されてゐたのであります。藪から棒にロイド・ジョージが演説をしたので、獨逸は泡を喰つてしまひ、その尻の持つて行き所がなく、遂に獨逸皇帝より、大使に向つて「お前は英國はやらぬと報告したで



はない乎。ロイド・ジョージは平和主義といふが、その道では畢竟お前が欺まされたのだ。さういふ奴はいかぬ。直ぐ返れ」といふので、メデルニヒは召還されてしまつたのであります。併しそれはたゞメデルニヒのみでは無く、總理大臣のアスキスも知らなかつたのである。當時の閣僚も知らなかつた。しやべつた當のロイド・ジョージも、一時間前までは知らなかつたのであります。

かういふわけで、政治の事、國家の事は、前から企んで、二二が四、二四が八でやつて行くと思ひますが、そればかりではないのであります。碁の定石の様なものと思ひますが、併し或時、或る機會、所謂風雲が虎擲龍拏の時にはその時その時に變つて行くのであつて、それを知らなければ、歴史は解らぬのであります。かう云ふ様に歴史は動くものであり、舞臺は廻るものであることを知らなければ、到底歴史は解らぬのであります。

## 五 國史研究の必要

それを悉く唯物史觀など、云つて、恰も高利貸が利息を勘定する様なことをやつて、それで歴史が讀めるなど、いふことは、横暴なことでありませう。縁日の植木屋でさへも、その時の氣分でまけたり、まけなかつたり、まけても大まけにしたり、とても解らぬのであります。人間といふものは實に解らないものである。寸前暗黒と申しますが、全くその通りであります。單に人間を經濟的の動物と見て、それ以外の何物でも無いなど、思ふのは、大なる間違であると思ひます。

私は人間の複雑性を識認して、初めて差別的見解があり、この見解があつて國史の研究は始めて出来ると思ふのであります。差別的見解は同じ人間でも人間としては同じであるが、支那人には支那人、日本人には日本人、英人には英人、亞米



利加人には亞米利加人、それ〴〵違つた特色を持つてゐることが解ります。この見解に依つて、初めて歴史の謎は若干解けるのであります。然るに此の謎を解かずに、西洋人も、日本人も、支那人も同じ者と思ひ、人を知らずに自分のみを知つて、これで總てをやらうなど、いふことは大なる失錯であります。

例へば日本人同志ならば、向ふから取らうとしても、此方から頭を下げると、出した手をも引込めますが、西洋人であれば、向ふが取らうとする時に、此方で手を引込めれば、直ぐそれを取つてしまうのであります。取つて行く相手は何でもかでも取つて行くといふ時に、頭を下げるなど、いふことは間違である。日本人は兎角、此方のことのみを考へ、これ程此方が考へてゐるんだから、向ふもかうだらうと考へてをりますが、向ふの國民性は思遣りが無いのであります。何でも譲らぬといふのがその國民性である。さういふわけでありますから今日譲ることのみ考へてゐるのは、歴史を讀まぬからであります。歴史を讀みさへすれば、

支那に對することも出來、亞米利加に對することも出來るのであります。然るに支那人も亞米利加人も人類であるから、同じであるなど、思ふのは大間違である。同じ一家に於きましても、同じ父を持ち、同じ母を持つ兄弟でも、兄と弟では性質が違ひ、姉と妹では性質が違つてゐるのであります。顔だけを見れば、瓜を割つた様に似てゐる姉妹でも、實に違つたものが出て來るのであります。況んや歴史、習慣、風俗、教育、宗教の違つた民族が、それ〴〵對立する時に於て、これを一樣、平等に考へて、此の著物は誰にも似合ふなど、考へるのは、大なる間違であります。

これを考へて見ますれば、國史に返ることは、國體の尊嚴を知るのみならず、外國から侵略して來る思想を防禦し、そのみならず帝國の威信を發耀する上に、大なる助けであり、光であり、導きであります。

私共はそこで國史を研究する上に於て、第一人類、第二には日本人、この二つを



考へる必要があるのであります。これを十二分に考へれば、單に唯物史觀、人間を經濟的動物といふ、一の指尺だけで捌くことは、極めて不十分、不合理といふことは、申す迄も無いのであります。

以上大概申上げましたことに就きまして、皆様方も御了解下さつたこと、思ひますが、私の考へまするに國史の研究は何れの國にも、非常なる影響を與へてゐるといふことであります。獨逸の獨逸魂を作つたのは、必ずしも國史のみではありませぬが、尠く共近世獨逸魂は、歴史に依つて養はれたものであります。その備付けの歴史の爲めに獨逸は、あれ程叩きつけられたではない乎といふ人があります。それも一つの理窟でありませう。併し備へ付けの歴史があつたからこそ、獨逸は世界を敵とし、足掛け五年戦つて、その領分内に一步も敵を踏み込ませなかつたのであります。獨逸は戦に負けたのでは無く、飲食物に困つたのである。それで遂に已むを得ず敗れたのであります。戦で敗れたのではありませぬ。多勢に

無勢で、やり切れなくて敗れたのであります。併し今日の獨逸は、一度氷が解けて春が來ると、その下の百草が萌出る様に、擡頭して來たのであります。それは藤井君が今日の獨逸を見て來られましたから、藤井君から最近の機會に、皆様が聽かれるであらうと思ひます。私は千里眼でありませんが、私の考をより具體的に云はれるであらうと信じて疑ひませぬ。

兎も角これは何である乎。獨逸魂を養つてゐたから、世界を敵として戦つたのであります。然も敗れたとは云へ、依然としてその魂が存してゐるのは歴史の力でありませぬ。單に獨逸のみでは無く、佛蘭西の如きは、チエルの書いた『佛蘭西革命史』などはその爲めに佛蘭西革命のみならず、ブルボン家を顛覆したのであります。

頼山陽の『日本外史』などは申す迄も無いことであります。英國のシーレー、グリーンの書いた『英國史』、獨逸のトライチケの書いたものなど、與つて國史研究の上に力があることは、云ふ迄もありません。



## 六 國史研究の態度

如何なる國でも、國民性を結晶せしめることは、歴史の力が最も大切であります。但だ我國に於きましては、譯の解つた人は歴史を用ひず、歴史を用ひる人は、敵の武器として用ひ、日本の歴史を偶々研究しても、これを世に公にする機會がないのであります。私はこれを甚だ残念に思ひます。且つまた日本の歴史にも無数の人物があります。然るに世界の英雄といへば、小學校などでは、ナポレオンや、リンカーン、ワシントン等を申します。偶々日本の英雄と云へば、近くは乃木大將、遠くは楠正成などと申します。日本ほど英雄を大切にせぬ處はありません。書畫骨董を大切にしながら、何故我々の祖先たる英雄を研究せぬのでありませう乎。

一例を舉げて申しますなら、奈良朝に於ては聖武天皇、或は又た源頼朝のことに就き、私共は研究して行きたいと思ひます。最後に申したいことは、同じ楠氏を論ずるにも、頼山陽は、正成のことを書き、正行のことを書いてをりますが、その息子であり、弟である正儀のことは、山陽も極めて不得要領の筆を用ひてをります。私は三人の中で、どれがいゝかとは申しませぬが、正儀に少からぬ好感を持つてをります。尊敬を持つてをります。正儀は親や兄の様な行き方をしてゐないのであります。

「好兒不使爺錢」といふ言があります。彼は親の足型を踐まぬのであります。彼は時勢の切迫を看破し、南朝の爲めには北朝と妥協する見識を持ち、細川頼之と妥協したのであります。正成は湊川、正行は四條畷等、それら有名であります。私はそれを悪いとは申しませぬ。併し正儀に至つては、彼が妥協の政策を執つたのは、南朝の皇室に對して不忠では無く、己の見識でやつたのであります。正成は二人とも良い子を持つたのであります。一人は死に、一人は妥協、何れも



南朝の爲めに盡したものであると私は考へてゐるのであります。

私は此點に就きましても、正儀に縁故のある河内の金剛寺に行き、種々文書を見て、さう考へたのであります。これは一例であります。我々は隠れたる偉人、誤解された英雄、難有味を了解せぬ先輩に對して、研究すればする程、それは實に無盡藏でありませう。

かうして機會ごとに研究を持寄つて發表をして行けば、結構であると思ひます。但し歴史の研究をするのに必要であるのは、公平であること、負惜しみをせぬこととであります。一旦自分が云つたことであるから、それを正さぬといふことは不可ぬのであります。凡そ歴史によらず、學問には負惜みが一番不可ぬのであります。互に持寄つて考へ、是でよいといふ時に、また考へ、考へて行つて、本當のものが出来るのであります。

歴史は初めから定論を爲すべきものではありません。今ではかうである。今は控訴院、此上は大審院、控訴院や大審院の上は無いなど、いふことは云ふべきものではありません。併しその中には朱子の様な人があつて、此は宜しい、これは悪いといふ人があつても宜しい、そつといふ人はそれで悪く無いのであります。併し總てがそうならず、その人もその一として、研究して行くことが大切であらうと思ひます。

餘り申上げることが長くなりまして、此次には申上げることが無いだらうと思はれるかも知れませんが、その時には新手の皆様が入り代り、立ち代りて、種々研究して行つたならば宜しからうと思ひます。私もそれ迄には勉強して、御參考になる時には、又た申上げて見度いと思ひます。此處には本を持つて來ました。これはチャンダーク傳でありますが、皆様は既に神話に近く考へてをられるのであります。五、うが、今でもチャンダークは英吉利、佛蘭西に於ては生きてゐるのであります。五月三十日はその祭日で、なか／＼盛んであります。五百年前のことではありますが、



今日に於きましても英國の新聞にも佛蘭西の新聞にも、盛んに出てをり、放送などもあり、種々やつてゐるのであります。五百年前の一婦女のことを『タイムス』初め堂々たる大新聞、大雑誌が、張膽明目して論じてゐる位であつて、歴史上のことは、苟も閑却出来ぬのであります。

シエクスピアの一個人すら澤山の書物が出来てゐるのであります。日本では死ぬとすぐ忘れてしまふのが原則となつてゐるのは、如何にも残念であると思ひます。これ等の點に就きましても、大日本國史會に於きまして、御同様に宣傳、研究して見度いものであると思ひます。

(昭和六年六月二十日、青山會館に於ける大日本國史會發會式に於て)

## 歴史と國民教育

### 一 緒 言

只今小野君より極めて有益なる御話がありました。實は私は御當地に話をしやうと思つて來たのでありませぬ。曾つて御當地には私の親しき友達が生れてゐたのでありまして、懐しく思つて居りましたから、一度御當地に出て見たいと言ふ考へがありました、偶々此の機會に於て、罷出たやうな次第であります。然るに一寸話をするやうにと言ふことであつて何か挨拶でもすれば宜いかと思ひましたが、案外の大入り大繁昌で實は少し吃驚したやうな次第であります。

これでは私の話が貴下方の耳によく徹する乎、否乎、私も保證の限りではないのであります。併しながら聞えないのは私の罪ではなくして、貴下方が澤山に御出



で下さつたからして、責任は寧ろ貴下方にあると思ひます。どうぞ悪しからず御勘辨を願ひたいと思ひます。

## 二 新發田と予

第一に御話を申し上げなければならぬことは、何故私が新發田と因縁がある乎と言ふことであります。思ひ廻らせば非常に昔のことでもあります。何年昔であつた乎、私も勘定しなければ判らない位であります。多分私は十九か二十の時であります。私が肥後の熊本の郊外に大江義塾を私の父と俱に建てゝゐたのであります。二十位で私塾を建てると言ふことは、非常に生意氣であると御考へになりませうけれども、昔は仲々生意氣である。十五六から天下國家のことを論じてゐた位で、二十頃になればチャントと一人前の量見は付いたのであります。今は仲々そうではなくして、三十になつても、未だ立たないやうな人がないでもない。併し

長生きすれば宜い譯で、決して差支へないのである。私が恰度私塾を建て、居つた時に、ある日變な男が私塾に舞込んで來た。名札を見れば太田稔と書いてある。太田稔と言ふ名は聞いたやうな男であると思ひましたが、兎に角來る者は拒まずで、私の塾にその男を泊めて置いたのであります。泊めて置きますと、その男は私より歳が一つか二つ多かつたと思ひますが、私が講義をすればチャント私の横に坐つて、私の講義を聞いて居る。時々「先生貴下の講義はこゝが間違つて居るやうである、私は斯う言ふ考へを持つて居る」と、私の横から生徒の前で私に議論を仕掛るやうな變な男で、段々聞いてみると、十遍に一遍位は先方の言ふことがよい、「君の議論は良いかも知れぬ」、そう言ふ譯で、段々とその男と懇意になりました。

それからある日、私が熊本附近、皆さんは多分御承知にならないか知れませんが、水前寺と言ふ所があります。公園でありますが、其處に連れて行つて、そこにある



有名な餅を二人で喰へて、その芝原の真中に寝轉んで色々話をした。その中に懐中から名刺を出して「甚だ相濟まないが、實は私は太田稔と言ふ名ではない、私は越後の新發田の者で梅田又次郎と申すものである。詐つて來て居るのは、實は御尋者である、今軍法會議にかゝる所を逃げて貴下の所に來て居るのだ」。私もそれを聞いて成程不思議な男で多分何か曰付きであらうと思つてゐたが、それはそうかと段々聞いて見ますと、士官學校に入つたが何かの譯で軍曹になつたのである。軍曹は面白くないと軍曹の着物を全部包みにして、それを陸軍省に送り返して、乞食旅行をやつて、東海道から遂に肥後の熊本迄やつて來たのである。それから段々と考へたのち、「それぢや貴下も一つどうせ逃げることならば日本では掴まる、もう少し逃げたら宜からう」と言ふことで、上海の方に逃してやりました。上海に私の友達が居るが、その友達は文部大臣になりました長谷場純孝と言つて東亞學館と言ふ學校を造つて置きました。其處に逃げろと言つて逃してやり

ました。逃げて居る間は無事であつたが、餘り一所に居坐らない男と見えて、ヒョッコリ日本に歸つて、とう／＼その爲めに牢に入つた。それから先の話は非常に長くなりますけれども、どうした因縁である乎、とう／＼一生梅田君と懇意である。どうしても離れられない。正直に言へば餘り私の益友とも思はれないが、顔をみれば可愛いやうな氣がする。可愛いと言つて立派な男ではない。どうも可なり悲惨な顔をして居る。それで丁度日清戦役の時にどうした因縁か、私が廣島に行つて居たら、私の宿に又た陸軍から割付けられてやつて來た。日露戦争の時には私の社の従軍記者としてやつたのでありますが、そう言ふ氣質の人であるからして、勝手な行動をなすからして、とても不可ないと言ふことで、内地に送り返すと言ふやうなことになつたのであります。その時に參謀本部の高級副官をして居つたのが堀内文次郎、只今豫備中將になつて居る堀内文次郎と言ふ人に、私が頼んで「どうか送り返す杯と言ふ無理なことをせず、俺が説諭狀をや



るから暫く辛棒して貰ひたい」と言ふことでやつて來たのである。仲々よい人でありましたが、そう言ふ風な人で、恰度私に對して禁酒すると言つて書付を下さつたのが、十七回、十七回の禁酒の書付を頂戴した位であるが、とうとう禁酒しなかつた。非常に面白い人である。學問も可なりあり『溝口浩齋公傳』を私の民友社で出版した。それが昨年總選舉で、此方に來て居られたがとうとう逝くなつた。どうして働いてゐたのか、私はどういふわけで越後に來たと言ふことは知らない。越後に來る前に兵庫縣に居り、淡路市からは肴の干物を送つて來た。妙な所に行つて居ると思つてゐたが、遂に今度は越後の方から危篤の電報を見て嘘乎本當乎と思つて驚いた。實に梅田君と言ふ人は、一生數奇不遇でありました。極めて私も同情して居る一人であります。そう言ふ緣故で、私は新發田の事を知つて居るのであります。

もう一人違つた筋の新發田の人で懇意がある。是は梅田君よりも少し金を澤山もつて居る。即ち大倉喜八郎と言ふ人である。大倉君と友達になつたのも不思議な因縁であります。

御郷里に對して、色々言ふのでありませぬが、寧ろ東京に於て、大倉君の評判は決して良い評判ではない。奸商とか何とか言つて色々言つたものである。私が書いたのではないが、私の『國民新聞』に何か大倉君のことを書いたらしい。所があの大倉と言ふ人は仲々面白い、金持に珍らしい元氣な人である。「徳富君に逢ひたい」と言つて議論にやつて來た。是は面白いと言ふことで、私の社は、貧乏な社で殆んど二疊敷き位な應接間で、始めて大倉君と色々議論して見た。所が仲々此奴は言ふことが面白い。それで議論した揚句お互ひに握手して別れた。大倉君も逢つて見れば徳富と言ふ男は面白いと思つたらしいが、私も此の金持は少し毛色が變つて仲々話せると思つた。それから大倉君と懇意になつたのである。是は大倉翁が死なれる迄交際をつゞけて居りました。そう言ふことから私も大倉集古館の常議員



になつて大倉君の遺業を輔けて居る次第であります。

そう言ふ譯でありまして、御當地の方には、貧乏で失敗の方の代表者とも言つて宜しい梅田君とも親友である、金持になつて成功者の代表者とも言ふべき大倉君とも親友である。然もその兩方共通する仲々面白い氣質がある。是が新發田氣質と言ふのではない乎と思ふのであります。仲々面白い、我儘なこともなく、で自分の理窟を言つて人の言ふことは聞かぬやうな妙な所がある。それで仲々淡泊である。仲々面白い。私は斯う言ふものが新發田氣質かと言ふやうに感じて、一度は此地に出てみたいと言ふやうに感じたのである。私が斯の如き御話をすれば、地下の梅田君も地下の大倉翁も苦笑して居るだらうと思ひますが、面と向つて私は随分彼等にもひどいことを言つて居りますから、決して憤る心配はないのであります。

### 三 日本國史を看よ

私はとても今日は大演説は出来ない。茲に『歴史と國民教育』と言ふ題をつけたけれども、是は先程午飯を頂戴する時に、是非題をつけてくれと言はれたから、極めて新しい、小野さんの御言葉で言へば極めて尖端的な題である。今から一時間許り前に出來た題であります。

それで本年は、御承知の通り、勅語の四十年御發布の記念と言ふことになりまして、多分御當地に於ても、十月の末には、必ず會があるだらうと思ひますが、併し今日に於て、吾々は勅語を何に依つて解釋する、勅語の趣意を何に依つて見る乎と言ふことを考へて見れば、それは日本の歴史に依つて見るより外はない。勅語の意味は悉く日本の歴史にある。それで皆様方が本當に勅語の御趣意を御諒解にならうと言ふ御考へになれば、必ず日本の歴史につき御考へにならなければならぬ。然るに日本の今日に於ては歴史と言ふもの、研究が動もすれば部分的に流れて歴史そのものにつき、綜合達觀して行く所が少ないのである。日本の歴史家と言ふ



中には、色々偉い歴史家もある。今日現存して居る人の中にも、立派な歴史家がある。併しながら、その御方々は大概林の中の樹の詮議をして居られる。未だその林と言ふものゝ詮議にはかゝつて居らない。學者から見れば部分的の樹の詮議と言ふことも、決して無用ではない。併しながら、吾々普通の人間から考へて見れば、歴史と言ふものは、一本々の樹の詮議よりも、林そのものにつき考へなければならぬと思ふのであります。

それで日本の歴史と言ふものを考へる時には、吾々は日本の歴史の根本思想、日本歴史の大主腦、大本體につき考へなければならぬ。ある場合に於ては、例へば長慶天皇の御陵は何處にある乎と云ふことにつき、色々詮議立をして居る事も決して無用ぢやない。けれども吾々普通の者に對しては、そう言ふ御陵の爲めに時間を用ふるよりも、寧ろ日本歴史そのものを見なければならぬ。日本の歴史そのものを大體に見ると言ふことに就ては、吾々が考へてみなければならぬことは、

日本の歴史と外國の歴史との比較研究である。

#### 四 日本の元首と外國の元首

外國では家來があつて、然る後に君があるのである。人民が始めて出來て、然る後に君が出來たのである。

然るに日本は君が出來た後に人民が出來たのである。是が日本の歴史と、外國の歴史と違ふ根本である。支那の所謂る三代の治と言はれる堯舜も選舉で上になつた乎、腕力に依つて王様になつた乎、兎に角も人民と言ふものがあつて、その人民の好意的賛成に依つて、王様になつたのであります。然らざれば征服的威力に依つて王様になつたのである。皇帝になつたのであります。然るに日本に於てはそう言ふ所はない。日本に於ては、皇室と言ふものが始めに出來て、然る後に國民と言ふ



ものが段々擴がつて來たのである。是が外國との歴史的相違である。甚だ恐入つたことであるが、遠方の隣國であります。英國の皇室と比較研究して見ませう。英國の皇室では幾度朝廷が變つて居る乎知れないのであります。御承知の通り佛蘭西に征服された時には、佛蘭西流の王様になる、次にスコットランドの王様が入り、その次にはオランダから迎へたのである。都合の悪い時には、まるで國民が寄つて王様に免職を申付る。そうして都合のよい王様を外の國から迎へて來る。今の王様の血統もハンノーバーのケオルヒ、ルードウイツヒ公を迎へた。獨逸の一の王國から迎へて來たのである。英獨戦争の時には、英國の王様が獨逸流の名を使つては悪いと言ふので、新しい名を御使ひになつたやうな次第であります。斯様なわけで英國現在の皇室は、英國の人民よりも、極く新しく獨逸から入つて來たものであります。

歐羅巴諸國に於ては、御承知の通り、何處の人を王様にしやう乎と言つて、年中評議をして居る。ギリシヤ杯と言ふ所、又たはブルガリヤ、ルーマニヤ杯と言ふ所は、勿論歐羅巴の凡有る國に於ても、都合のよい王様を迎へ、都合悪ければその王様を追出し、外から迎へて居る。甚だ立入つた言葉であるが、吾々の家で下女下男を雇ふ、若くはやめる、それよりも多少手數がかゝつて居る位のものである。まるで王様を取替る杯と言ふことを、寒くなれば麥藁帽子をやめる、暑くなればを被るやうに、頭に戴くけれども、頭そのものと帽子とは違ふのである。外國の君主など、言ふものは、帽子のやうなものである。帽子の中にも八十錢位するカン／＼帽もあり、二十圓位するシルクハットもある。併し高いにせよ、安いにせよ、概して帽子であります。吾々の皇室は吾々の首である、吾々の頭である。首を切り頭を切つて、さうして精神が生きて居る筈はないのである、上にあるから皆な同じことであると言ふやうに御考へになるのは、大變な間違ひである。帽子と頭の相違のあることを、皆



様方によく御考へを願はなければならぬ。かういふわけであるからして至極合點の行かない憲法論や議會政治や、色々末節末流の考へをなさつては、とても本當の日本の歴史と言ふものが、御判りになる筈はない。そこをよく御承知ありたいと思ふのであります。

### 五 神皇正統記の主旨

日本には偉い歴史家が居ります。その偉い歴史家は誰である乎と言へば、北畠親房卿である。此の北畠親房卿と言ふ御方は、所謂る京都の公家であつて、此の御方は南朝の忠臣で、その息子は御二方も南朝の爲めに力を盡され、功績を致されました。此の親房卿が敵に圍まれ、常陸の國に籠城されて居る時に、何等の参考書もなく、只一卷の年代記を基として造られたのが『神皇正統記』と言ふ本である。此の歴史と言ふものは、實に私は只今讀んでも有難涙のこぼれる歴史である。不肖私も此の歴史の一部分を、今上陛下の御前で御進講するの光榮を辱ふして居るのであります。

此の書物は何處が偉い乎と言へば、今申した通り、日本の皇室日本の國體と言ふものにつき、極めて明白なる觀念をもつて書いてある。その次には日本の國は、日本の人民に依つて成立つものであると言ふ、極めて明白なる觀念をもつて書いてある。即ち日本と言ふ國は、君民一致、君と民と一緒になつて始めて、日本の國が成立つて居ると言ふことの原理原則を書いてある。それで時としては朝廷の政の間違つた時には間違つたと書いてある。彼の頼朝の如き、泰時の如き、今日に於ては朝廷の權利を奪つたと言つて、山陽杯も攻撃して居るが、北畠親房卿は彼等に對しても、極めて寛大な觀察をされて居る。實に親房卿の如き偉い歴史家と言ふものは、日本には未だ曾つてないのであります。

私は北畠親房卿の『神皇正統記』の色々な本を集めて置きました。その中には北畠



親房卿が書かれて百年もたない時代に筆寫した本を持つて居ります。併し私は自分の書いて居る歴史が、維新に近い歴史でありますから、それを校訂して世の中に出すに就いて、私の友達の東北大學の先生をやつて居る山田孝雄君と相談して、「その方を貴下がやつてくれ」と頼みました。そこで山田君は只今頻りにやつて居ります。もう半分ばかり出来て、此方に出發する二日前に、山田君がその原稿を東京に持つて來られて、私に見せられた。何れ遠からず貴下方も御覽下さるであらう。實にあゝ言ふものに就いて、貴下方が御考へになれば、日本の歴史につき完全なる考へが出来るのである。水戸光圀の『大日本史』頼山陽の『日本外史』等畢竟するに『神皇正統記』の意見を用ひて居るに過ぎないのである。

## 六 國史教育の必要

私は歴史と言ふものに就き、日本人は誤解して居ると思ふ。日本では歴史と言ふことは昨日地震があつた。今日は流行病があつた、地震と流行病と言ふものが何等關係ないやうに別々に書いてある。例へば今年は飢饉があると、その次に米騒動が起つたと書いてある。飢饉と米騒動が別々に書いてある。事柄が別々になつて居るからして、そう言ふ事は百覺しても千覺しても何の役にも立たない。所謂る木を數へて林を忘れて居る様な話である。併し本當の歴史と言ふものは、事と事との繋りを知らなければ不可ない。地震があつたから家が壊れた。家が壊れたからして、人が中に住むことが出来ないから、外に放浪しなければならぬ。放浪すれば色々害蟲に冒されるから流行病に罹らなければならぬ。即ち地震と流行病と言ふものは、そう言ふやうに繋つて居る。飢饉があれば米が高くなる、米が高いからして、米屋に對して打壊し運動を始める、斯う言ふことになるのである。

歴史と言ふものは、事實と事實とを別々に考へては、何の役にもたない。この事實から次の事實までチャンと一ツ串に貫いて、始めてこゝに日本の歴史は、神



武天皇の紀元元年から昭和五年の今日に到る迄、三千年の意味が判るのである。何時の何日には廣瀬中佐が閉塞船で死んだ。何時の何日に乃木大將が殉死した。斯う言ふ風に單獨に知つても何の役にも立たぬ。乃木大將の殉死と言ふことは、明治天皇の聖徳を物語る一ツの大きな繪巻物の中にある一ツの繪である。そう言ふ風の關係をもつて讀んで始めて判るのである。

要するに日本の歴史と言ふものは、始めから終りまでチャンと連絡があつて、一つも離すことが出来ない。それを別々に考へては、意味をなさない。こゝには教育家の御方も御出になりませうし、御若い方々も御出になりませう。お若い方は軍人になる方もある、實業家になる方もある、或は政治家になる方もある。或は自分の財産を守つて農業をなし、商業をなす方もある。或は官吏或は宗教家凡有る方面の仕事に御働さになる方もありませうが、職業が違つても、人間は同じ事である。人間が同じ事である許りでなく、日本帝國臣民たることは、同じであ

る。日本帝國の臣民として、吾々が服膺しなければならぬのは日本の歴史である。日本そのものを知らなければならぬ。所謂るギリシヤの哲學者ソクラテスが言つた「己を知れ」と言ふことは、己れの歴史を知れと言ふことであります。其の意味に於て、日本の今後最も必要なることは、日本の國史の教育であると、私は信ずるのであります。ある人が申します、獨逸が此の如く世界を敵として、世界から袋叩きになつたのは、トライチケの歴史が無闇に自國のことを褒めて獨逸の人心を煽動したからである」と成程それも多少の理窟がある。併しながら獨逸が五年間世界を敵として戦つて、遂に刀折れ矢盡きて世界から蹂躪されたにも拘らず、一度講和條約が成立するや、猛然と頭を擡げて平和以來十年經ざる今日に於ては、再び新たなる獨逸國民が興つて、既に世界の恐怖になる迄に恢復したのは何の爲めである乎。若し獨逸が世界から叩かれたのが、トライチケの罪とすれば、獨逸が叩かれたに拘らず、斯の如き窮迫を猛然と迅速に恢復したと言ふことは、



將にトライチケの力と言はなければならぬ。かくの如く歴史と言ふものは、國民生活の上に實に有難きものである。然るに世の中に悲しき者は、自分の國の歴史を持たないものである。アメリカ杯は色々研究しても、コロンブス發見以來の事を書いても日本の南北朝以後のことである、アメリカの獨立と言ふものは、日本の八代將軍吉宗よりも餘程新しいのである。如何にアメリカが歴史を書かうとしても、ワシントン以前に溯ることは出來ない。私はアメリカ人に對して、歴史の尠ないことを非常に同情するものである。分けてやりたいけれども、御馳走ならば分けてやることが出来る、酒ならば一杯御呑みなさいと言つて盃をさすことが出来るけれども、日本の歴史をいくらアメリカ人でも分けてやる譯には行かない。吾々がアメリカの歴史を貰ふことが出來ないやうに、日本人が日本の歴史だけを専らにするより仕方がない。外國にも歴史があるけれども、その外國のは自暴自棄の歴史である。その自暴自棄の歴史さへない國がある。寔に哀れなるものであります。

然るに我が國に於ては、三千年來一貫したる歴史が嚴存して居ります。此の歴史を忘れて、徒らに外國の自暴自棄の歴史、又はは情け無い歴史と言ふやうなもののみ研究没頭して居る杯と言ふことは、本末輕重を認るもの極めて大なりと言はなければならぬ。

私はどうぞ皆様方が國民教育の首腦たる我が日本歴史を御研究にならむことを祈つて止まぬ次第であります。

(昭和五年九月廿四日、新潟縣新發田町小學校に於て)



## 近世史に於ける土佐及び其の將來

### 一 緒 言

滿堂の諸君、唯今河野君から、有益にして且つ興味多きお話を、お聞きになつたことであらうと思ひます。河野君は大阪毎日新聞の副主幹でありまして、殊に雄辯を以て聞えた人であると承つてをります。私はこれから河野君の後を受けまして貴下方にお話を申し上げたい。私の申し上げますお話は、幸ひにして貴下方が御共鳴下さる乎どう乎、私もよくは自分に判らないのであります。

私は御當地には尠からざる御縁があるものであります。これまで既に今回を併せて三回參つてをるのであります。第一回は明治十七年、丁度私が廿二歳の時であ



ります。第二回はその翌々年、明治十九年私が廿四歳の時であります。今日私が御當地に參つて見ますと、即ち四十五年を隔て、參つて見ますと、實に御當地も變つてをります。豈御當地のみならんや、私自身も實に多く變つてをるのであります。廿四歳の青年が、今日は既に六十八歳の老人となつてをるのであります。

この御當地の變化を見まして、私は實に世の中の進歩といふものは著しいものであると思ふのであります。それと同時に人間は實に意氣地ないものであつて、高知は進歩して往くが、自分はどうも段々意氣地がなくなつて行くのではあるまい乎と思ひますと、洵に私も悲觀せざるを得ぬのであります。しかし一昨日中村に於て、『國民樂天論』を以て、諸君にお話してをる以上は、私自ら樂天たらざるを得ぬのであります。仍つて私は疲れたる心に鞭つて、何か貴下方にお話して見たいと思ひます。

私が御當地に參りましたことは、斯く申す通り三回であります。御當地の諸先生には屢々接しました。又私の若い時から御當地の偉い方々は屢々私を指導されて下されてをるのであります。そこで私は何かその御恩を報じたい、何か高恩の萬分の一でも御地の方々のお爲めになることを申上げて、御恩を報じたいといふ譯で出たのであります。今夕の話は面白いにせよ、面白くないにせよ、役に立つにせよ、立たないにせよ、私の心は何か貴下方のお爲めになることを、一言なりとも申上げて見たいと思ふに外ならないのであります。どうぞその私の心を貴下方がお汲み取り下さつて、私の申上げることの始から終りまでよくお聞き取りを願ひたいと思ふのであります。

## 二 義堂、絶海

私の題は『近世史に於ける土佐及び其の將來』——これは題としては随分長い題で



あります。然し此の長い題を私は極めて短くお話をしやうと思ふのであります。元來御當地は近世史に於けるといふばかりでなく、昔からして武勇を以つて起つて居る所の國であります。土佐の國は健げな國であります。健依別の國、即ち質實剛健といふことは今日に限らず、近世史に限らず、昔からかゝる言葉があつて、土佐の人が質實剛健であるといふことは、必ずしも美德ではない。土佐に於てはむしろ當然であります。丁度土佐の人が鯉を食べるのと同じことで、土佐の人が犬を闘はせると同じことで、土佐の人がいろ／＼と元氣を出して行くといふことは、昔からやつてをるのであります。併しながら、土佐の國はそればかりでなく、昔から學問の國であり、且つ思想の國であります。土佐の知事にはいろ／＼の人が來てをりますが、最も偉い日本の文學史に特筆大書すべきところの知事が來てをります。多分斯く申せば御承知でありませう。それは渡邊國武君であります。いやさうではないのであります。もう少し古い所の知事で、即ち「土佐日記」の

作者紀貫之といふ人が來て居ります。この人は實に土佐に於ける所の、文學知事であります。斯くの如く初めから日本に二人とない歌詠み、二人とない國文の作者——作者といふばかりでなく、殆んど國文の創造者ともいふ可きところの、知事を有つてをる位であります。

それから室町時代に於きましては義堂、絶海といふ二人のお坊さんが出てをります。私は今日そのお坊さん方の住んでゐたところ——更に詳しくいへば、そのお坊さん方の師匠であるところの夢窓國師の住んでゐたところの、吸江に參りましたが、この演説を皆様にする爲めに、時間の遅れることを恐れて、残念ながらその下を通つただけであります。若し今夜演説がなかつたならば義堂、絶海の兩名僧に敬意を拂ふつもりでありましたが、死せる坊様より生ける貴下方に敬意を拂ふつもりで、今夜出て來たのであります。併しながらいくら貴下方が生きてゐても、文學者としては失禮ながら、義堂及び絶海の方が偉い。義堂といふ坊様



は、日本に於ける禪宗の御坊様である。この人が日本に於いて、『孟子』を読むことを始めた人であります。坊様が儒教の本を読むことを盛んならしめたといふことは不思議であります。事實その通りであります。この人の作りました書物は『空華集』といふものがあります。又た『日工集』といふものがあります。是等のものは日本文學史上最も大切な位置を占めるところのものであります。それから絶海といふ坊様は、これは詩人でありました。この人の詩は實に吾々今日に於いても感心するところであります。この人の作つた詩に——貴下方も御承知でありませうが、

熊野峰前徐福祠

満山藥草雨餘肥

只今海上波濤穩

萬里好風須早歸

といふ詩であります。この詩を作つて、明國の太祖に見せたところが、明の太祖がその詩に和韻して來たといふことでありまして、實に日本の坊様が支那の皇帝

に詩を示し、そして支那の皇帝に和韻をさせるといふ位、實に偉い坊さんでありました。この二人の坊さんは何處から生れた乎。土佐から生れた。高知ではありません。中村と高知の間多分高岡郡で生れたと思ふ。間違つてをりましたら、寺石先生が歴史に詳しいお方でありますから、間違ひを正して下さいであらうと思ひます。然し高岡郡であつたらうと思ひます。二人ともこの郡から出たといふことを聞いてをります。頼山陽等も絶海のことを非常に賞讃してをります。實にこの人の詩人としての立場は、日本文學史上に於ては、偉いものであります。かういふ譯でありまして、室町時代まで、土佐が日本文學史に寄與したところのものは、多大であります。然し私はそれを論ずるのではないのであります。私はそれから後のことを申さなければなりません。即ち私の申すところのものは、近世史でありますから、少くとも徳川の初期から申上げねばならぬのであります。



## 三 谷時中、山崎闇齋

徳川の初期に當つては、御承知の通り、御當地には、谷時中先生といふお方があ  
る。私は今日谷時中先生のお墓の下を通りました。お墓は山の上にありますので、  
矢張り今夜の演説に關係があつて、遂に失敬して山の下に立札があつたから、そ  
の立札に向つて帽子を取つて遙拜して歸つて來ましたが、この谷時中先生と云ふ  
人は實に偉い人であります。その門人に野中兼山、山崎闇齋等の高弟が出てをり  
ます。

谷先生の弟子の野中兼山先生のことは、私が今此席で一朝一夕に申し上げらるべき  
ものではありません。この先生は徳川の初期に於ける、一代の政治家であり、  
政治家として最も毛色の變つた政治家であります。この人は學問を政治に用  
ひた人であります。學問を政治に用ひた人は、その時代に於いて備前に熊澤蕃

山といふ人があり、土佐に兼山先生がある。熊澤蕃山のことは、暫く措いて論じ  
ませんが、兼山先生といふ人は、實に偉い人である。この人は學問に於ては王安  
石程になかつたが、併し腕は王安石以上である。この人は理想を直ぐ實行した人  
であります。土佐人は理窟をいひますが——土佐人に限らない、私も申しますが、  
詳しくいへば土佐のお方は最も理窟に長けてゐるが、中には實行といふことをあ  
まり研究せない人がないではない。然るに土佐の生んだこの偉い野中兼山先生  
は、理窟と實行とが常に伴つてゐた。私は若し兼山先生が理窟を十云うて實行を五  
位にして居つたら、あゝいふ悲惨な最後にはならず済んだかも知れないと思ふ  
てをります。然るに兼山先生は理窟を十云へば實行は十二である。理窟十に實行  
十二で實行の方が勝ち過ぎる。その爲めに遂にあゝいふ最後を遂げた人であつ  
た。即ちこの人は單に土佐に於けるところの一大政治家であるのみならず、徳川  
初期に於ける模範的政治家であります。其の以後も、土佐には人物が彬々輩出



した。併し何人と雖も先生には齒が立たない、何人も先生ほどの資格がない、見識がない、膽力がない、手腕がない。その爲めに幾ら先生を真似しやうとしても真似が出来ないのであります。それは兎も角も、尠くとも、政治家は斯くあるべきものとして、先生は一の模範を示した人である。乃ち土佐の所謂る實行派の大將として私は野中兼山先生を擧げて見たいのであります。

然るにこれと同時に山崎闇齋といふ人が出たのであります。山崎闇齋は京都の人である乎、或は滋賀縣の人である乎、はつきり私は今こゝに覺えてをりません。兎にも角にも延暦寺の下にある日枝神社に祈つてさうして生れた兒であるからして——日枝神社は比叡山の麓なる琵琶湖畔にありますから、兎に角滋賀縣の神社の申子であります。その戸籍面は滋賀縣につけて置いて置いてもいゝであらうが、學問はこの土佐でやつた人で、即ちこの人は歸化土佐人であります。土佐に歸化した人で吸江にゐた人であります。吸江の吸江庵にゐた人であります。この人は實に日

本の歴史に偉い關係を有つた人であります。私はこの人のことを唯一言にして申せば、孔子の道を日本化した人は、即ち山崎闇齋であるとかう申して差支へなからうと思ひます。孔子の道は應仁天皇の時から日本に入つて來たけれども、まだ誰も充分に是を消化し得たる人はなかつた。然るに山崎闇齋はこれを消化して——丁度孔子の道が鯉であれば、山崎闇齋は孔子の道を鯉節に造つてさうして削り出して、誰にも彼にも飲めるやうにした人であります。

鯉は海にをりますけれども、鯉節は海には居ない。孔子の道は支那から來たけれども、山崎學は山崎闇齋の作つたところの學問であります。而してその學問の源は即ち谷時中先生その人であります。それ故何れかと申しますと、山崎學といふものは土佐が發祥の地であります。

山崎先生は孔子の道を以て、わが國民的精神に當筈めて來たのであります。それで一言にして申上ぐれば、山崎學の本領は孔子の道を日本化したところにあるの



であります。即ち或る時闇齋先生が弟子に向つて「若し支那から孔子様を大将となし、孟子を副將となして、この日本に攻めて来たならばお前達はどうする乎」とかう申しましたところが、弟子達は顔を見合せて返事が出来なかつた。そこで先生は聲を勵まして「俺ならば孔子であれ、孟子であれ、日本に攻めて来たならば、孔子様の首を申受ける、それが即ち孔孟の道である」と申しました。實にこの孔子であれ、孟子であれ、日本に攻めて来た以上はその首を取るのが孔孟の道であると説いたのであります。この調子で支那の學問を讀んだ人でありますから、その眼識が違つてをつたのであります。この山崎學といふものは實に天下に多大の功献をなしたものであります。

#### 四 山崎闇齋學の普及

私は茲にもう一つ申上げて見たいと思ふ。徳川三百年の間に於きまして、日本の儒者といふものは澤山をりますが、然しその最も——一國の文化若しくは國民的精神に影響を及ぼし感化を興へたるものは誰である乎といへば、東に物徂徠あり、西に山崎闇齋ありといはなければならぬ。而して徂徠の學問は、日本を風靡したけれども、これは恰も今日で申せばアメリカにかぶれてをるアメリカ學者、ロシアにかぶれてをるロシア學者、ドイツ、フランスにかぶれてをる學者の如く、要するに支那にかぶれたところの學問を廣めたのであります。文化的影響は日本全國を風靡したが、山崎闇齋に至りましては、日本精神を日本全國に普及した英靈漢であります。然し山崎闇齋といふ人は、野中兼山先生のやうに政治家的能力はない人であつたが、然も實に大なる教育家であります。この闇齋の門下から偉い人材が雲の如く出てをる。逸材が數へ切れない程出てをるのであります。私が一寸申して見れば會津に入つては、第一の弟子が保科正之であります。これが會津初代の殿様であつて、會津といふ國が後々まで徳川の親



類でありながら、勤王の精神を有してゐたが、これはどういふ譯乎といへば、實はこの山崎闇齋の影響である。明治維新の節會津の城を攻める爲め御當地の板垣先生を初め土佐の連中が、薩摩の連中と行つた。詳しくいへば板垣先生と伊知地正治先生この二人が行つて會津を攻め落した。然し會津は籠城して、仲々頑強に抵抗した。が、あれは決して天皇陛下に對して弓を引いたのではなかつた。薩摩と長州に對して弓を引いたのであります。その事情が判つたから降參した。それで會津戦争の眞の事情が漸く後に判つて、申すもはゞかりあることでもあります。が、會津の血統の御方がやんごとなき竹の園生の御方に嫁がれることになつたのであります。

それからまた闇齋の學問は若狭の方に入りました。この若狭の方はどういふ風に行つた乎といへば、一方に於きましては酒井忠義といふ維新の少し前に於ける京都の所司代——これは幕府から差遣はされたるものであります。最も勤王の心があつて、孝明天皇の御爲めに少からざる献身的忠誠を致してをるのみならず、その家來に當るのが梅田雲濱先生。

妻臥病牀兒叫飢 一心偏欲攘戎夷

如今死別兼生別 只有皇天后土知

かういふ詩を作つた梅田雲濱といふ人は、山崎闇齋の影響を受けた志士であります。又た水戸に入つたのは三宅觀瀾といふ人で、これが山崎學の水戸に這入つて行つた初めであります。又た京都に居つたのが即ち淺見綱齋といふ人。この先生が山崎學を京都に扶植した人で、刀のはゞきに赤心報國と彫りつけてゐた人です。この人は日本に於ける勤王家として最も偉い人です。それから綱齋の跡を嗣いで出たのが竹内式部といふ人で、この人は京都の公卿を門人として、時の天子桃園天皇の御心を動し、遂にそれがために寶曆事件といふ大事件が出来たのであります。これが即ち維新回天の前觸れとなつたのであります。このこ



とは私の書いた『近世日本國民史』にありますから、皆様が讀みたいとお考へならば、それを御覽下さればよく判ります。然るにその山崎先生の門人の淺見綱齋先生。又その淺見先生の門人の谷秦山先生といふのがありますが、これが即ち高知縣の生んだところの又た偉大なる學者であります。この谷秦山先生は谷將軍の先祖であります。秦山先生が如何に大義名分を明かにした乎、王道霸道の區別を明かにした乎、今日でいへば皇室中心主義を明かにされた乎といふことは、其の著書を御覽になればよくお判りのこと、思ひます。或は『日本書紀』の神代卷とか『中臣祓』とかそれ／＼國典に就いて註釋を施してをります。又たこの人は天文にも明かであり、曆數にも明かであり、凡有る學問に通じてをられたが、併しながらその學問の根本精神は、皇室中心主義であります。これが即ち土佐に於ける山崎闇齋以來の勤王の色上げといつてもよい。この人の及ぼした感化は土佐ばかりでない。恐らくは土佐に於けるよりも、他の地方に於ける感化が、多かつたかも知れません。

### 五 維新史に於ける土佐の三傑

それから遂に維新になつて土佐にはどういふものが出て來た乎。私が考へるにその時に土佐には三人の偉物があると思ひます。私が若し土佐の三傑といふことを定むれば、第一が武市瑞山、第二が吉田東洋、第三に——どうも殿様を下位に置くのは怪しからんとお考へになるかも知れませんが、歴史ではどうも人爵によつてその位置を定める譯に行かぬから正直に申しますが——第三に山内容堂、この三人がどうも近世史に於ける土佐の三傑であらうと思ひます。山内容堂を數へるのは殿様だからといふのではない。あの人は實に偉い人であつた。この人が幸にして殿様でなかつたら、どんな大仕事をされてゐたかも知らないほどの、仲々の偉物でありました。殿様であつたから第三番目になられたのであります。兎に角この三人は何れも非常なる個性の勝つた人で、三人共生粹の土佐ッ兒で、他所



の血は一滴も混らぬ、純粹なる土佐の氣質を有つてゐた人であります。この純粹なる土佐氣質の三人がこゝに相寄り合はうては一緒になるといふとは非常に困難である。それで若しその時容堂公と瑞山先生とが一緒になつたならば、その時には吉田東洋先生が反對黨、又た東洋先生と容堂公とが一緒になつたならば、その時には瑞山先生は反對黨、又た瑞山先生と東洋先生と一緒になつたならばどうである乎、それは私には判らない。兎に角さういふ風であります、然るに事實はどうである乎といへば、容堂公と東洋先生と一緒になつて、瑞山先生が反對であつた。私は今日に何れが良い乎といふことを、どうも明言するに甚だ苦しむ。何故なれば、此處にお出になる貴下方の中にも、或は此方が良いといふ人もあり、或は彼方が良いといふ人もあり、恐らく御當地でも議論が定つてゐないだらうと思ひます。併しながら土佐の立場からして申せば、容堂公と東洋先生のやり口が當然のことではない乎と思ひます。何といつても、山内家は徳川家に縁があ

ります。關ヶ原の役に他の大名は大概倍の加増を受けたのであります。他の大名は十萬石取つた者は廿萬石、廿五萬石取つた者は五十萬石、例へば加藤嘉明——これは松山の殿様で十萬石の大名であつたが廿萬石になつた。同じ加藤清正は肥後半國の大名から全國の大名となつた。然るに同じ殿様で掛川六萬石の大名であつた山内家は、土佐一國の國守となられた。其の石高はといひますと家康は五十萬石以上であらうと考へてゐた相ですが、さうすれば殆んど十倍近く貰つたのであります。一豊公が土佐を貰つた後家康が一豊公に向つて「お國の石高は幾らになつてをる」と問ふと、一豊公は「廿萬石以上であらうと思ひます」と答へたので、家康はびつくりした——狸爺のことであるから或はびつくりした風をしたかも知れない——「それはまことに残念なことである。わしは曾て長曾我部元親が太閤を御招待した時、その御馳走振りが非常に盛んなもので、とても五十萬石以下では出来ない様なすさまじい御馳走振りであつたから、それで尠くとも五十萬石は



あらうと思つてゐたが、眞に意外千萬である。然しもう斯うなつては致方がないから勘辨してくれ」とかう云つたと云ふことであります。それはどうでも遠州掛川の六萬石から土佐一國の國守となられたので有難かつたに相違ない。その有難さが二百年も三百年もつゞいて來た。容堂公のやうな横着者でも、矢張り有難いといふ祖先代々の傳統的精神に囚はれて、徳川家を潰す譯には行かぬ。朝廷には固より勤王をせなければならぬ。それで公武合體で行かう、さうすれば朝廷の方もよし、幕府に對しても義理を缺かない、斯ういふ考へであつたのであります。

所が瑞山先生は土佐流の純理一方でやらうといふ人である。吾々は誰の家來でもない、普天の下、卒土の濱、みな天皇の御家來たらざるはない、勤王をするといふことが日本臣民の義務である以上は、徳川が勤王に反對すれば徳川も倒さなければならぬ、山内家が勤王に反對すれば山内家を倒すとはいへないが、山内家と絶

交して差支へないといふので、家來が君に絶交狀を投げつける位の人であります。これは御承知の通り瑞山先生は、勤王の國學者鹿持雅澄先生——これは義理の叔父——に小楯といふ諱をつけてもらつた程の關係があり、大義名分、純理的勤王主義の人であつたからして、當時の時勢に都合よく當はまつて行くといふやうなことはやらす、何處までも純理的勤王で行かうといふことになつたのであります。しかし時勢の變遷は、御承知の通り、武市瑞山の方の論が勝つやうな譯になつてをるのであります。

## 六 人物多きに過ぐ

併しその間に於て吾々が近世史に見逃すことの出來ない二人の豪傑が土佐から出て來たのであります。それは坂本龍馬、中岡慎太郎といふ二人で、この二人は浪人でありませう。この二人の浪人が薩摩と長州を一つにくるんで、所謂薩長聯合とい



ふものを造つた。これは必ずしも二人の力のみとは申しませんけれども、二人の力が最も與つて大なるものであります。然るに又たその間に二人の豪傑が出て來た。それは後藤伯と板垣伯——これは瑞山先生の仲間といふことも出來ず、又た必ずしも東洋先生の仲間といふことも出來ない。後藤伯は固より東洋先生の親類でもあり、同志でもあり、乾兒でもありますから、仲間といつてもよいが、板垣伯はさうではない。この後藤伯といふ人は飽くまで平和的解決で行かうといふ人であり、板垣伯は飽くまで武力的解決で行かうといふ人であります。即ち薩摩の西郷と握手したのは板垣伯であり、薩摩の小松帶刀等と握手したのは後藤伯である、斯ういふ風に土佐はやつて來た。實は土佐には餘り役者が多過ぎた。それで舞臺が錯雜して來た位で、一方で不如歸劇をやる時、一方で忠臣藏をやるといふやうな、同じ舞臺で幾多もの仕組みがあつて、バラ／＼にやつてをる。若し今少し土佐に人材が無かつたならば、山内侯は公爵になつてゐたかも知れない。人物が多過ぎて、

従つて議論が多くて、爲めにどうも舞臺は、こんがらかつてしまつて、とう／＼どうも互ひに役者同士が叩き合ふといふ調子で、見物が飛び出して留めなければならぬといふやうなこともあつた。私は維新史を研究してをりまするが、土佐に人物が缺乏といふのではなく、むしろ多過ぎる。土佐には人物が少かつた方が事がうまく行つたのではなからう乎、そうでなかつたなら、もう少しこれ等の人物が一緒に纏り、一緒になつてゐたならば、薩摩もない、長州もない、肥前もない。殆んど土佐一國で日本全體を風靡したかも知れない。併し残念ながら、互ひに牽制運動をやつた。互ひに牽制して此方に行かうとすれば彼方に行く、彼方に行かうとすれば此方に行く、斯ういふ風になつて來る。がそれにも拘らず遂に薩長土と云はれるほどに維新の大改革に進出して來たといふのは、實にこれは土佐人の英氣勃々たる所であつて、これは流石に偉いと思ひます。現に御承知でもありません。伏見鳥羽の役で鐵砲の音が聞えた時、容堂侯は御前會議に於いて「これは怪しから



ぬ。慶喜は領土を献上してお上に對して頭を下げてをるのに、その下げてをる頭を叩く法がある乎」と斯ういふ風に辯じて居られるが、その時に薩摩の兵隊と長州の兵隊と與に、土佐の兵士が既に砲火を放つてゐた。これは段々詮議の末山路忠七、二川元助斯ういふ連中が勝手次第に鐵砲を打出した。殿様のいふことを肯かぬ、所謂る自主的行動でやつて來た。それから當地から板垣伯が兵を率ゐて出た。これも亦た自主的行動であつたのであります。さういふ譯で兎も角撥を合せて此處まで進出したといふのは、私は流石に偉いと思ひます。これ等の事實について考へて見れば、土佐はなか／＼偉いことをした。然し英語の *Wight has been* と云ふ言葉がある、斯うしたなら斯うなつたかも知れないといふ言葉、その言葉通りに土佐が萬一其の全力を合して、斯ういふ風にやつてゐたら、まだこれ以上の大きな事實が出来たかも知れないといふ感じが、私にないでもないのであります。私の申上げる所は未だ終りではないのであります。

### 七 維新回天史と土佐

土佐は兎も角事業として日本に寄與した所のものも大であるが、思想として日本に寄與したるものは更に大であります。貴下方は思想などは何でもないとお考へになりますでせうが、さうではない。近頃日本には唯物史觀など、いふ論が行はれて、人間の相場はまるで米の値の下るやうに下つて來た。これまでは人間は萬物の靈長など、威張つて來たが、唯物史觀では人間は所謂る少し氣の利いた動物位に相場付けられてしまつた。唯物史觀といふは例へば一の人種が他の人種を襲つて來るといふは、恰かも、雪が降る時になれば、山の奥にゐた猪が、食物に缺乏するから、ノコ／＼と里に出て來ると同様に、丁度北の方にゐた人種が生活的に缺乏するからノコ／＼南の方の食糧のある所を襲つて來るのだと、斯ういふ風に所謂る人種の運動も、猪の運動も、豚の運動も、みな同じやうに考へてをるの



であります。私は或る程度までは此れも差支へないと思ひます。併し人間が唯豚のやうなもの、猪のやうなものと同じに飲みたいから飲む、食ひたいから食ふ、寝たいから寝るといふだけのものと考へることは、餘りに御同様に安ッぽく見積るものではない乎と思ひます。私が考へるには、吾々は唯物史觀といふものばかりで、世の中のことを判断することは出来ない。

人間は所謂物慾があります。けれども物が物慾以上のものがあります。楠木正成はなか／＼足利尊氏に降参しなかつた。降参しなかつたばかりか、尊氏を討取らうとして、自分は戦死をいたしました。もし尊氏に降参してゐたら、攝河泉の三國位安全に貰ふことが出来たのでありませう。しかしながら自分はさういふことを知つてゐて後醍醐天皇の御爲めに戦死した。孔子の所謂「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」といふ言葉は、唯物史觀では到底説明することは出来ないであります。

「山行かば草むす屍、海行かば水漬く屍、」かういふ言葉は唯物史觀では説明は出来ないであります。それで人間が大いなる事件、大いなる運動、大いなる事業を爲すときには、大いなる理想、大いなる精神、大いなる感激といふものが必ずそれに添うてゐるものであります。然るにその精神その理想その感激といふものは誰が與へた乎といふに、維新の大業を爲す時に與へたる所のものは、即ち山崎闇齋先生、淺見綱齋先生、谷泰山先生、斯くの如き人が、段々與へて來たものであつて、板垣先生以下野戦攻城の兵が維新の偉業に與へたる功績も、決して少くはないが、それと同時に谷時中、野中兼山、谷泰山諸先生以來鹿持先生に至るまで、所謂土佐の學問、土佐の思想、天下に與へたる感化は、更に大いなるものがあつた。然るに世間では土佐で一番偉い産物は三菱だといはれるのは、私の腑には落ちませぬ。私は決して三菱を攻撃するのぢやありません、三菱も土佐人のやつた事業の最も大なる成功であります。土佐は山の國である。それで大山師が時々出て來る。不



幸にして當り損つたのが後藤伯で、幸ひにうまく當つたのが岩崎で、二人共豪傑であります。後藤伯も亦た土佐に於いて毛色の變つた豪傑で、後藤伯にうまい參謀があつたならば、或は岩崎の倍位の富を得たかも知れません。或は日本近隣の一國位後藤伯が取つて、その王様になつたかも知れない。仲々この人は無鐵砲といへば無鐵砲、脱線といへば脱線であるが、大山師の標本。——私の友達といつては、年が少し多いから失禮かも知れぬが、實際友達であつたところの中江兆民先生がいつたことがあります。「人は後藤には中心點がないと斯ういふけれども、後藤には中心點所ぢやない、其の周邊がないから中心がない筈だよ」と評してゐたが、この位大きな人であつたから、色々の夢を見たであります。然るに後藤伯の四分の一乃至半分位の山師の岩崎がうまく當つた。當るも當らぬも二人とも偉いと私は考へてゐる。二人とも日本の文化にはなか／＼貢獻した所が多いと思ひます。けれども、岩崎の富は或は他に之を求むることが出来るかも知れぬ、併し、谷秦山先生の如き人は日本にさう澤山あるものぢやない。貴下方が此處彼處の公設市場から買つて來るやうな代物ぢやない。

#### 八 板垣氏の自由民權論と谷氏の勤王國權論

餘り私は色々のことをお話ししましたがもう一言だけお話しには居られない。明治になつてから、土佐は又大變なものを日本に寄與した。それは何乎といへば、即ち板垣伯の自由民權論であります。板垣伯の自由民權論は、その末派末流になれば、實に奇激なる論をしたのであります。矢張り勤王的自由民權論であります。門人輩が過激なことをいつたからとて、その先生までとがめる譯には行かぬ。板垣伯の旺盛であつたことは、私は親しくこれを見てをるから皆様方に證明することが出来るのであります。この人は純粹なる土佐人で、しかも純理一方の人であります。自分の理窟だけ云つて、人のいふことは餘り聞かない人であ



る。それで自分の論はなか／＼立派に立つてをるけれども、その議論に反対であるといふことは、承知出来ない人であります。世の中の事はこの方面から見れば、斯ういふ意義がある、他の方面から見れば又た意義がある。山でもこっちの方から見れば柔かく見えるが、こっちの方から見れば又た尖つて見える。その人の見方によつて自ら意見が違ふことは止むを得ないが、板垣伯はそれが承知出来ない。自分の見るところばかりを見てゐて、人の見る方面は考へてゐない。違つたものは皆間違ひであると攻撃して行くから、なか／＼どうもむづかしい。大概のものは、板垣さんに勘當せられ、又た此方から板垣さんを勘當して、段々同志が少くなつたやうな譯である。併しこの人は偉い。この人の自由民権論といふものは、遂に天下を風靡して、その爲めに所謂の國會の請願まで出来た。その爲めに政黨が組織され、その爲めに立憲政治が出来、その爲めに帝國議會の開設が出来て来たのでありまして、それで土佐が立憲政治に貢献したといふことは、又た非常な

ものであります。固より土佐人ばかりぢやない。併し土佐人は理窟を考へると同時に、宣傳がうまい。それは一つは土佐人は非常に雄辯であつて、自分の意見を十分に、或は餘り上手に過ぎて思はないことまでもいふ才能を有つてをる。二つには——貴下方怒つてくれちや困る——二つには自分天狗で臆面がないからして、大概人を喰つてをる。人前で決して遠慮しない。それで何處までも自分の説を述べることに就いては、何等臆する所がない。この二つの理由によつて、宣傳力といふものが、非常に多い。御覽なさい。土佐から何處にも彼處にも、自由民権の宣傳者が行つてゐた。その爲めに遂に日本を自由民権論で風靡したのであります。又たその反對に谷將軍の所謂の勤王國權論——これが又た土佐から出て来た。是亦全國にその仲間と聯絡をとつてやつて来たのでありますが、この方は自由民権論ほどあまり演説や何かうまい人が多くなかつたが、御當地の水野寅次郎君等が、奔走して盛んにやつて来た。で互ひに斯ういふ風にやつて来たやうな譯



で、維新後明治の御代になつて、谷先生や板垣先生、かういふ人々が、互ひに意見を有つて日本全國を風靡して來たのである。今日に於いては谷氏の所謂勤王國權主義、板垣氏の自由民權主義が何れも日本に受け容れられて、丁度良い加減になつて今日になつて來たのであります。この二つの力といふものが、又た土佐の近世史に於て、非常に寄與してをるのであります。

### 九 土佐人の覺悟

貴下方は唯だ物質ばかり考へて、土佐人はまだ金持が少いからもう少しもらけていゝ、實業家が少いといふやうなことをお考へになつてゐる方があるかも知れない。それはそれとして措いて、土佐が所謂日本國民の思想上に貢献したといふことは、實に多大であるのであります。これは未だ貴下方のお力ではない。

中には貴下方のお力も少しは這入つてをるかも知れないが、これは貴下方の先輩の力である。これで大概近世史に於ける土佐といふことは、略々お判りになつたことと思ひます。幸ひにして然らば、將來貴下方は何を以てこれ等先輩に對して、お報いなさる乎といふことを、私は貴下方に向つてお聞きしたい。

これほどに貴下方の先輩は、孝明天皇の歴史、明治天皇の歴史に大いなる功を立てゝゐる。然るに昭和の御代に於いて、皆様方は何を以てこれ等大先輩に酬ひ、所謂土佐の光りを將來にお輝しになるお積りであります乎、實業方面に於いては固より岩崎家の如き人がある。貴下方が岩崎を標準にしておやりになつてもよからう。併しながら土佐の誇りは單に物質上ばかりでなく、尤も多く精神上にあります。その精神上の誇りは何れにある乎、これを私は貴下方に伺つて見たいと思ふのであります。

私はもう多言しない、併しながら今後貴下方に望むものは、貴下方の先輩の後を



繼いで、わが日本帝國の臣民として、大いなる理想を有つて行つて頂かなければならぬことでもあります。單に大いなる理想を有つて頂くのみならず、土佐固有の力を以て、これを日本全國民に宣傳して頂きたい。即ち貴下方は、自分の足下を照らすばかりでなく、わが日本國の燈明臺——日本國民の光りとなつて頂きたい。それは何である乎といへば外ではない。わが皇道である。即ちわが皇道といふ皇は、天皇の皇、皇國の皇、皇朝の皇、貴下方の先輩吉村寅太郎先生は斯ういふ詩を作つてゐる。

一家一國何須患

宜使本朝爲本朝

私は皇道といふは、この日本をして日本たらしむ、これが即ち皇道の發揮である。わが三千年來一貫してゐる所の歴史、わが萬世一系の皇統、わが歴代の列聖によつて發育培養せられて來た所の日本精神、これをわが國內に行ひ、これを世界に行ふといふことが、即ち吾々の所謂皇道を中外に發揚するといふことであり

ます。皇道といふことを一言にして申して見れば、所謂道義立國であります。道義の立國、詳しく云うて見れば、吾々自ら道義的精神によつて立ち、國民的道義の精神によつて立ち、更に國際的に於ては國際的道義の精神によつて立ち、日本の皇道をわが帝國內に宣揚するのみならず、更にこれを世界に宣揚せなければならぬ。これは即ち山崎先生、谷秦山先生その他の人々が種々研究して來たものであつた。これを新たに今日の時代に應用して、何處までも掲げて行かなければならぬ。

最早私が申上げたことは略お判りになつたと思ひます。貴下方は如何に一國の理想が大切なことである乎、御承知であらう。理想なき國民はそれこそ豚の如き國民である。眞の國民たる資格のあるものは理想あるものである。理想は即ちわが皇道であります。皇道は即ち皇室中心主義を以て、中外にわが帝國の道押し廣げて行くことでもあります。



『人國記』と云ふ本に土佐の國を評したことが出てゐる、それに斯ういふことがある。「土佐の者は誠ありて氣立も又素直なり」と、又た面白いことがある。「他國の猿は藝を教へるになか／＼いふことをきかないが、土佐の猿はよくいふことを聞いて藝を覚える」といふことがあるが、それ位土佐は昔から正直で、素直且つ健かな國民であるといふ評を得てをる以上、まさか、これを昭和の今日に取消す譯には行かないだらうと思ひます。

私が考へるに、土佐の人士といふものは癖はあるが——無いとは云へまいと考へまするが、然し概していへば、實に日本に於ける優秀なる人種であります。この優秀なる土佐氣質とふものは、長曾我部以來の鎖國的精神によつて養ひ得たるものであつて、この鎖國は土佐の爲めには物質上多少の損はあつたけれども、土佐精神といふものを養ふには餘程利益があつた。然るに今日の如く自動車を通ひ、又た汽船を通ひ、無線電信、ラヂオその他色々のもものが出來て來ては、土佐鎖國と

いふものは段々滅じて來る。私は皆様方が土佐人の癖をお捨てになることは別に異存はないが、然し土佐人の優秀なる、他の人が羨しく思ふ、及び難いと思ふところの土佐の所謂土佐魂を失つてしまひになるといふことは、如何にも私は惜しく思ひます。如何に交通は自由であつても三百年以來養ひ來つた土佐男子の魂——男ばかりぢやない。御婦人にもある。——この土佐魂といふもの、これを押し廣げれば日本魂、更にこれを押し廣げれば、皇室中心主義を以て、わが國家のため、貴下方の祖先の名を辱めないやうに、御奮勵あらむことを、私は衷心より祈つてやまない次第であります。

(昭和五年十一月十一日、高知市役所議事堂に於て)



## 青山伯の眞骨頭

### 一 緒 言

大分時間が経ちまして、且つ是まで皆様方のお話になつた事が、殆んど私の申上げたいと思ふ事の全體を竭して居ります様でございますからして、此上私が申上げる事は、殆んど蛇足に過ぎないのでございます。然しながら私は伯爵に對しては、敬愛を捧げて居る者でありまして、此の稀有なる目出たき會合に於きまして、一言申し上げずして止むことができませんのでございます。それで極めて簡単に、又た是まで皆様方のお話になつた事との重複を避けまして、一二點私の申上げて見たいと思ふ事を陳述するつもりであります。どうぞ極めて短時間でありますから、御清聴を願ひ度うございます。

58  
26



## 二 田中伯と予

私が田中伯と御交際と申しては失禮でございますが、兎に角田中伯なるお方を見たのは、先程高田早苗先生がお話になり、唯今又た室田君がお話になつた所謂第一山縣内閣の警視總監として、新聞記者を御接見になつた時であります。丁度明治二十三年でありました。私が『國民新聞』を初めて發刊したる年であります。其時に警視總監が會ひたいから出て來る様にと云ふ事でありました。

私は未だ嘗て警視廳の門戸を潜つた事はありません。丁度明治二十年の末は保安條例と云ふ吾々に取つて頗る恐ろしき所の條例が發布せられまして、それが實行せられました。まだ日が経たない事でもありますから、警視廳から呼ばるゝなどゝ云ふ事は、恰も地獄から閻魔様の召喚状でも來た様に心得て居つたのであります。行かう平行くまい乎と、私は餘程考へて居りましたが、どう云ふ男である乎。新

しく警視總監になつたと云ふから、一つ見物に行つて見やうと云ふ事で、私は出かけたのであります。

其時に伯爵はまだ餘程お若かつたのであります。斯く申す私もまだ二十代でありましたから、可なり若いのであります。伯爵が總監として、園田安賢君が副總監としてお會ひ下さつたのである。只今承りますれば、高田先生も其席に居らつしやつた相ですが、つい私は先生の居らつしやつた事だけは失念して居たのであります。多分先生も私の居た事はお忘れになつて居ただらうと思ひます。

さうして黙つてお話を聽いて見ると、實は私も意外の感をなした。云はれる事が如何にも尤な事を云つて居る。元來私は警視總監などゝ云ふものは、物の理窟の分る筈のものでないと考へて行つたのである。それが云はれる事が如何にも合理的でありまして、一々尤もである。悉く私も記憶はしないが「貴下方も國家の爲めに筆を執る、吾々も國家の爲めに此職に在るからして、歸する所は國家の事で



ある。だからして互ひに是は是、非は非、互ひに意見の違ふ事は違つて差支へないが、故らに、攻撃せんが爲めに攻撃するとか、反対せんが爲めに反対するなどと云ふ様な事はよさうではない乎」と云ふ様なお話で、至極私は尤もと思ひまして歸つてから其の感想を書いたのであります。

其時に警視廳と云ふ飛んでもない所に這入つて見て、警視總監の話を聽いて見れば、案外譯が分つて居る。其時に「儒雅の風あり」と書いたのである。「儒雅の風」と云ふのは、儒は儒者の儒、雅は俗の反対の雅。外の文句は覺えて居りませんが、「儒雅の風あり」と云ふ事を書いたと云ふ事は、今も覺えて居ります。是には間違ひは無いと思ふ。兎に角私は、伯爵を見た最初の印象は「儒雅の風あり」と云ふ事である。此の私の印象は、先程から高田先生、市島先生、佐々木先生、三上先生、皆様方の云はるゝ所の殆んど全體を、此の二字で網羅して居ると申して、差支へないと思ひます。

然し段々私が其後伯爵の御交際を辱くし、今日に至りますると、中々伯爵は儒雅の風位ではない。まだ幾らも風があるのである。「儒雅の風」など、云ふものは、要するに伯爵の一面、或は寧ろ小なる所の一面ではない乎と思ふのでありまして、全體を通じて申しますると、矢張り私は、どう考へても伯爵は維新以來の老壯士であると考へて居るのであります。

### 三 一貫せる伯の主義

伯爵の維新前に於ける所の功業など、云ふ事に就きましては、本日皆様の御手許にお渡し致して居る所の伯爵の年譜が、よく是を竭して居るのである。又た是まで澤本君や何かの編輯された所の御本が、よく是を語つて居ります。今後私も更に詳細のものが出來ると思ひますから、今こゝでは申上げません。兎に角伯爵は、若し御維新の前におかくれになつたならば、伯爵は伯爵の常にお祭りにな



つて居る所の、維新志士と共に、祭られるお方であると云ふ事の、唯だ此の一言を以て足れりとするのであります。

大概の人は境遇が違へば、其心が違ふのである。昔は昔、今は今と云ふことであつて、昔は斯う云ふ人であつたが、今は斯う云ふ人になつたと云ふ様なことで、境遇と共に其の人間が違つて行くのである。然しながら伯爵に吾々が感佩する所のものは、昔も今も依然たる所のもので、昔の名前で申せば濱田辰彌、今日の名前で申せば田中光顯、其の名は違ふけれども、其の人間は私は少しも變らないものと思ふのであります。

伯爵は初めから尊王の志を持つて居られた。今日も尙ほ尊王の志を持つて居られるのである。伯爵の功業、伯爵の趣味、伯爵の凡有る方面に及ぼされたる所の色の感化、恩澤と云ふものは深く且つ廣く、高く且つ遠いのでありますけれども、要するに伯爵の初めから終り迄、私が見て居る所のものは何である乎。大義

名分を明かにする、勤王の志を以て終始一貫して居ると云ふ事が、伯爵の大本領であらうと思ふのであります。

此の大義名分と云ふ事は、段々世の中が進むに従つて、考へる人が無くなると云ふ譯ではありませんが、少なくなるのである。少ないばかりでなく薄くなるのである。然るに伯爵は、昔も猶ほ今の如く、今も猶ほ昔の如く、終始一貫、此點に於て徹底して居られるのである。此點に於て伯爵は實に吾々に對して、人間と云ふものは斯くあるべきものと云ふ一つの手本を示されて居ると思ふのであります。

#### 四 伯の眞面目

私が伯爵に感じて居る所のものは、勇氣である。勇氣と云ふ點に於きましては、先程三上先生のお話の通りに、責任を重んぜらるゝ時には切腹も辭せないのであ



る。私はさう思ひます。然し其の半面には自分が切腹する位の事ではない、切腹する時には、或る場合に於ては敵の首を打落して切腹する位の元氣があるのである。決して伯爵は自分の腹を切るばかりの人ではない。まかり間違へば相手を二つに斬る位の大決心を持つて居られる。此點が私共は伯爵の特色であると思ふのであります。

先程新聞から、色々伯爵を攻撃したなど、云ふ事がありました。其の時分の伯爵の御元氣と云ふものは、滅多な奴が近づいたならば、一刀兩断にする位であつたのである。決して伯爵は新聞の攻撃などを恐れる様な人ではない。其の位で怯む様な人ではない。攻撃すれば攻撃する程尙ほやり付けると云ふ様な元氣を出す人であります。

唯だ餘り元氣がある。伯爵の元氣が強過ぎる。自ら信ずる所のお厚い爲めに、時としては傍若無人の事を伯爵もせられたらうと思ふのである。是は私は決して伯爵ばかりではない。或は伯爵を生んだ所の高知縣の、所謂土佐の氣質ではない乎と思ふ。兎に角自分の信ずる所は周圍を構はず、勝手次第にやると云ふことが、お國風ではなからう乎と思ふ。其のお國風が伯爵の方には皆様よりも寧ろより多くあり過ぎはしない乎と思ふのである。然し其位に御元氣をお持ちになつて居るのであるからして、其の御精神が老いて益々壯んであると云ふことはちつとも疑ひを容れない。

私の唯だ伯爵に感ずる所のものは、其の傍若無人の自信力。其の天下を敵とするも構はない所の勇氣。さう云ふものを如何なる方面に用ひられた乎と云へば、それを天下國家の爲め、所謂少壯劍に杖ついで佐川を脱走せられた時の、當初の心事を、即ち二十代の時の心事を九十に近き今日迄も持して、それを彌々研ぎ、それを彌々磨いて居られる所に、吾々が感激止む能はざるものがあると思ふのであります。



## 五 晩年の伯

で伯爵の如何に老後を過ぎられた乎と云ふ事は、吾々に取つて實に有難き手本である。大概の人は所信を失ふと云ふばかりではない。年を取れば段々人間が耄碌して仕舞ふ。耄碌せない様な人は段々悪化する傾きがある。色々の點で悪化して行く。是はどうも人間は年を取れば能力が段々下ると云ふ事は致し方はないけれども、能力と共に動もすれば精神が下つて行く。然るに我が田中伯に至つては、老いて益々壯んばかりではなくして、晩節が彌々振うて來たのである。若し田中伯の御生涯を書いたならば、その御生涯に吾々が最も感激する生涯は、宮廷に於て明治天皇陛下に咫尺して蹇々匪躬の節を盡されたと云ふ時よりも、寧ろ江湖の遠きに在りて其君と國とを忘れず、老いて彌々國家の爲めに献身せらるゝ事にあると思ふのでございます。

斯の如きお方は一日世の中に生存せらるれば、一日天下の爲めになるお方であるから、吾々は單に茲に伯の八十七歳の壽を御祝ひするばかりでなく、百歳の壽を保つて、吾々後進の模範となつて、天下正義の生ける標本となつて、吾々を指導せられんことを、長く祈つて止まぬ次第でございます。

私の申上げる事は極めて荒つぽくて、殆んど此の多趣多様の田中伯を盡しません。然しながら單に私は其の最も重なる點に就て申し上げますと、田中伯は總ての志が後に物を残すと云ふ様なお考へは無い。即ち御自身の力も、精神も、財力も兼ねて集めて得られた物すらも、適當な場所に寄贈せられて居る。是は物を分配せられると云ふのではありません、田中伯が報國の精神を日本國に分配するつもりで分配されて居るのである。

どうせ田中伯も一度はおかくれになるべきである。人生古より誰か死なからん。誰でも死ぬる。田中伯もお死にゝなるに相違ない。然しながら古人の言葉に、



「大人は世界を以て墳墓とする」と云ふ事がある。私は田中伯のお墓は土佐の佐川ではない。又た決して蒲原の寶珠莊ではない。田中伯のお墓は我が日本帝國が即ち田中伯のお墓であるべきものと信じて疑はないのであります。

(昭和四年六月廿九日、青山會館に於ける田中光顯伯祝賀會にて)

## 田中青山伯

### 一 緒 言

閣下並に諸君、本日此の御目出度き田中伯爵の銅像除幕式に際しまして、一言皆様に申上ぐることを得るのは、私の最も光榮とする所で御座います。

場所申しますれば、大平洋の巨濤の洗ふ所の大洗、而も明治天皇の御尊像の傍であり、且これを建立せられた人々は、田中伯が殆んど一生の心血を注いだ勤王の發祥地ともいふべき所の、水戸人士に依つて、専ら行はれたのであります。其事といひ、場所といひ、而して曩に室田翁の言はれました通りに、本日は恰も田中伯が一身を國家に投ずる爲めに、國を脱走された所の、洵に思出の多き日でありますれば、總てのものが相合して、而も今日の如く、秋高く天朗かなる時に當りまして



天地も吾等と慶びを同じくするかの感じを持つのであります。斯かる場合に於きまして、私は何事を申して宜しい乎、自分でも言ふことを知らないのであります。私は此際田中伯の頌徳表を上るといふ譯ではありません。又た歴史家として、田中伯を十分此處でお話したいといふのでもありません。唯この洵に希有なる場合に於きまして、私の胸中にある感慨の一片を皆様方に打明けて、お話をしてみたいと思ふのであります。

私の見る所に依りますと、先程からお歴々の御祝詞がありました通りに、田中伯の生涯は、恰も生ける歴史のやうであります。歴史のパノラマであり、又た歴史の繪巻物のやうに感ぜられます。伯爵の生れたのは、八十八年前でありまして、天保十四年であります。天保十四年といふ年は、恰も水野越前守が儉約令を布いて其の絶頂に達した年であります。同じ儉約でありますけれども、昭和五年の濱口内閣の儉約とは、大分意味が違つて居ります。要するに水野内閣の儉

約令から濱口内閣の儉約令迄の間に、伯の長き一生涯は亘つて居るのであります。此間に於て、伯はどういふことをされたのである乎、私の見る所に依れば、伯の生涯は三つに分つことが出来るのであります。

第一は伯が壯年の頃、維新の大業に翼賛されたまでの時があります。

第二は明治天皇の側に奉仕して、さうして明治の偉業を輔けられたといふ時であります。

第三は閑雲野鶴に伴うて、更に一身を以つて世道人心の爲めに盡されたといふ時であります。

此の如く三期の生涯は、即ち伯爵の一生を貫徹するものでありまして、何れの生涯も結構ではあるが、特に最後の生涯程、私共に取つて尊きものもなく、有難きものもなく、又たさういふ例は珍らしいものと考へて居る次第でございます。